
日本人の尊厳-My VITAL SIGN -

新奈美咲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

日本人の尊厳 - MY VITAL SIGN -

【Nコード】

N3656N

【作者名】

新奈美咲

【あらすじ】

ほおのきあき

朴明希（16）は部活帰りに突如トリップ。ド田舎の貧乏な貴族の老夫婦に拾われる。ある日養父の勧め”スキラート学士院”に入学したのだが……。

テンパると方向音痴になる老け顔の騎士とかホラーなご令嬢とか歴史マニアのちよつと残念なイケメンとかががんばる話。そして王子の影が薄過ぎるという事実。

二重人格なマッドサイエンティストと少数民族の長老的存在でマイペースなにーちゃんはさらに影が薄いという事実。

そしてやっと(?) 事件が起きそうな予感……。

スキラート共和国（前書き）

スキラート共和国の歴史と地理について簡単にまとめました。

疑問があつたらちらりと覗いてみてください。

ネタばれになる可能性はあまりないと思いますが、見なくても読むのに支障はないので飛ばしていただいてもかまいません。

スキラート共和国

国の始まり

500年前、アースの民が最初にたどり着いたのは、現在の芸術大国、ナールファインでした。

それからしばらく、大きな集落がいくつもナールファインに現れます。

最初のアースの民が現れてから50年〜80年ほどのち（正確にはわかっていません）、現在のスキラートに小さな部族がまるまる一つやって来たのです。大陸を約三分の一に縦に割るクラレド山脈の麓で暮らし始めた彼らは、山の民。

男たちは山の獣を狩り、女子供はきのこや山菜、時には川魚をとって暮らしていました。

彼らの衣服は植物の茎から取れた繊維をより、アースで使っていた機織り機を使って布を作ったのです。

このような布を作ったのは、彼らが大陸で最初でした。

ある日狩りをしていた男の一人が洞窟の奥に淡く光る岩を見つけました。

手持ちの道具で少し削ると、中から光る鉱脈が現れたのです。これこそ、光石発見の時でした。

光石によって彼らは夜にも作業が出来るようになりました。あとに現れた部族と協力し、次々と便利な道具を作っていったのです。そしてこのスキラートは工業が盛んになったのです。

大陸

私たちの住んでいる大陸は横の長さが縦の長さの二倍もあります。
(縦は約3000キロメートルです)

また、この大陸には三つの国があります。

工業と交易の国、スキラート。芸術と漁業の国、ナールファイン。
そしてこの大陸の食糧庫ともいえる農業大国、コンテクロープです。

我が国は大陸の北西に位置する小さな国です。南には、ナールファインとの国境であるムール川が、そして東にはコンテクロープとの国境であるクラレド山脈があります。

山脈には昔の名残で複雑な坑道がありますが、貿易などは大陸の中心に近い(つまりこの国の南側)の整備された大きなトンネルが使われています。

この国の王都、ディガーフットはもと光石の採れる山のふもとにありました。しかし、いまから126年前、コンテクロープとの戦争が勃発。これはナールファインが間に立って和解条約を結ぶまで、21年間も続きました。

戦争が終わり、国境近く、特にアークライト辺境伯領のあたりはアーク&ティックの戦いでこれまでにないほど荒れ果てました。

そこで時の將軍、ヴィンセント・クラールンス卿の説得が功を奏し、当時の王は沖近くを開拓を決意。現在の場所に王都が定められ、王宮には天才將軍ヴィンセント・クラールンスの石像が建てられました。

0・0プロローグ・長いものには巻かれる

朴明希は何の変哲もない高校生である。

やつはいやー、と日々を過ごしている、ちょっとシャイな女の子である。

女子高ゆえに入学すれば一ヶ月で全員が変人ウイルスに感染するため、あえなく変人となった人見知りの16歳である。

そしてこの物語は朴明希が（予定では）日本人の尊厳を守ろうと奮闘する（かもしれない）果てしなく痛々しい物語である。

最後に言おう。

朴明希の座右の銘ははたして立派である。

日本人たるもの、大和魂でぶつかれ！

0・1ヨーロッパンガーデンにて

所謂、人生とかなんとかいうやつには取り敢えずまあ目標とかいうやつがついてまわるのではないかと思う。

それは第一志望に合格するとかピザパーティーを何とかひとそれぞれだ。

そしてごくごく一般的な高校生の彼女——ほおのきあき朴明希には目標があった。やっと期末も終わり、高校生活最初の夏休みを全力で遊び倒すという目標が。

それなのに——

「あら、見てアキ。揚羽蝶が飛んでるわ。綺麗ねえ」

のどかな庭園ガーデンの中、白いチェアに座る老婦人がたおやかに微笑んだ。あまり飾りのない深い緑色のドレスは老婦人の気品をより引き立てている。

ここは、日本ではない。

「そうでスね……」

明希はややぎこちなく答えた。慣れないドレスを着た、否——着せ

られた彼女は、必死に作り笑いを浮かべつつ蝶を目で追った。

老婦人が嫌いなわけではないのだが、どうも上品にうふふあはは、と言うのは苦手だ。しかも妙に歓迎され、丁重に扱われている身としてはそうも言っていられない。

老婦人がこの別邸にお茶をしにくるのは五日（つまりこの国では一週間）に一度のことで、普段は洗濯係のアナマリアにズボンを用意して貰っても、この日ばかりはちよつとしたドレス（というよりはワンピースなのだが）を着ることになっている。

「ごめんなさいねえ。私のお古なんか着せちゃって。女の子は今飾りたい盛りでしょう?。」

「いえ……」

明希は十分華美だ、という言葉を飲み込んだ。ここの人たちは私と価値観が違うのだ。

「お嬢様は謙虚でございますもの」

後ろから届いた深い声音に、明希はどうかポーカークフェイスを保った。お嬢様と言われる度にむず痒い感じがする。やめてほしいものだ。

後ろに控える侍女頭、シュリーはごく自然に秋を持ち上げた。紺のスカートに白いエプロンが眩しい。

「神様が授けて下さった御子だものね。おしとやかでお行儀もいいし！鼻がたかいわ」

明希は今度こそひくり、と笑みをひきつらせた。

声を大にして言いたい、その認識は間違っている。食べる時も使うフォークの順を覚えればあとはほとんど自然に出来ると言うものだ。何しろ緊張するのだから。

ひらひら飛ぶ揚羽蝶が明希の目の端をよぎる。老婦人は白髪混じりの灰色の髪を軽く手で撫で付け、微笑んだ。まるで我が子を見るような目で。

貴族が栄華を極めた頃のヨーロッパさながらの風景。その中に一人、いかにも東洋風の顔立ちをした明希は明らかに浮いていた。

なぜ私はここに居るんだろう？

盆でもないのに、こんなものすごく肩の凝るところに居るのは明希くらいのものだ。いやむしろ、明希しかないだろう。

勿論それには日本海溝よりはるかに深くてヒマラヤ山脈よりちょっと低いかもしれない理由があるのだ。

そう、なぜ明希が——ただの高校生ごときが、いくら辺鄙な田舎で尚且つ貧乏とはいえ、貴族と名のつく家の別邸に居座っているのか。これには総理大臣にもはたまたどこかの首相にも手のつけようのない理由わけがあつたのだ。

話は丁度、一ヶ月ほど前に遡る。

0 - 2 Cat Can Call?

それは突然の出来事であった。

その時の状況を説明しろ、と言われても明希にはきちんと答える術がない。なにしろあつという間に視界が黒くなったのだ。

その日の夕方、明希は通学鞆を持って電車を降りた。部活帰り特有の倦怠感が体を包んでいた。

午前中には塾があつたせいで鞆の中には勉強道具。高校生になった今、大学受験に向けて真剣に考えて行かなければならない時期だ。

そして、それはあと一步で玄関というところだった。

ちょうど扉の取っ手に手を伸ばしたまさにその時、上下感覚がおかしくなったように明希の視界はひっくり返った。

そして、あつという間にプツリと電源を切ったかのように目の前が黒に覆われ、それはまるで体のすべての器官が一遍に活動を止めたとでもいうように、意識が途切れた。

慌て伸ばした手は、虚空を掴んだ。

それこそ一瞬の出来事だった。これ以上説明のしようがない。

どこかで読んだ物語のように神様が出てくるわけでもなく、追われる身となって逃走劇を繰り広げるのでもない。

巫女でも勇者でも魔王でもない。

ただ起きたら質素な（といっても十分ひらひらした）寝巻きに身を包んで、子のいない老夫婦が神に授かった少女としての人生を歩んでいた。

迷信を信じた憐れな老夫婦の養子だ。

――只の世間知らずな貧乏貴族の娘

よくよく考えると、神が授けて下さったなどと言って不自由なく生活していることに驚くべきだ。

これだって全くありがちな物語。^{ストーリー}全く、偶然は起こるものか。

もちろん最初は怖かった。夜に独りで泣いたりした。

しかしそんな時期はとうに過ぎているのだ。

むしろ今はよくある王宮のドロドロ、いやデロデロに巻き込まれなくて済むことに明希は感謝していた。

美形含め、ああいうものは安全地帯から眺めるのが一番だ。……ま

あ、田舎の貧乏辺境伯がそれにお目にかかれるかどうかは別として

何はともあれ“お茶の時間”を除けば、明希は十分快適と言える生活を送っていた。

その時、老婦人の言葉に上の空で相槌を打つ明希の耳に、気取ったようなソプラノが響いた。

「まーたやってるウ。嫌なら断っちゃえばいいのにイ」

明希は思わずびくりと肩を揺らした。誰かいるのだろうか？侍女にしては不遜な物言いだ。

と、老婦人が目を細めて微笑んだ。

「あら、猫ちゃんだわ。……猫なんて飼っていたかしら？」

そこには白くしなやかな体の猫が優雅に歩いていた。

「はアア？あんたに飼われた覚えなんてないわよオ」

猫が喋った？いや、猫が話すなんてあり得ない。

しかし、猫の口が動くとも声も響く。明希が拭いきれぬ違和感に混乱する中、老婦人は至って平静だ。明希は微かに眉根を寄せた。

喋るだなんて――

……気のせいだ。猫は喋らない。

「……すみません。懷いてしまつて」

「いえいえ、いいのよ」

その猫は丁度一昨日ごろやつて来たのだ。

そう、只の猫。話すはずがない。たまたま余っていたクッキーをやったのだが、それで居着くようになったのかもしれない。

あくまで、只の猫なのだ。

「お嬢様、旦那様が書斎でお待ちです」

取り次ぎに来た侍女と話し込んでいたアナマリアが申し訳なさそうに明希に声を掛けた。お茶の時間を邪魔してしまったことを後ろめたく思っているようだ。

明希にとっては嬉しい——毎回礼儀作法について間違っていないか
びくびくするから——のだが

「分かりました」

そう言つて立ち上がった明希は既に白い猫の事など頭の隅に追いや
つていた。——そう、喋る猫なんて居るわけがない。只の空耳だ。

0・3 NOと言えない日本人

窓から夏の日差しが睨むように部屋を照りつける。必要なものしかない、ともすれば殺風景なその部屋で二人の人間が静かに話していた。

部屋は上品だが質素な家具と、最近建てられたらしい屋敷に不釣り合いな古びた燭台で彩られていた。パステルカラーなクリーム色の壁が淡い光を放っている。

装飾の少ない椅子に座った男はにこにこと人のいい笑みを浮かべた。年齢と共に刻まれた皺がさらにそれを穏やかに見せている。その顔は嬉しくて仕方がないと言うこの屋敷の老主人の気持ちを如実に表していた。

「アキ、朗報だよ」

分かりきったことである。明希は視線で先を促した。

「君はきちんとした教育を受けていないだろう？それに16歳だ」

そう言うとは彼は大きな白い封筒を取り出した。大きさはA4ほどだろうか。

当然明希はしつかり義務教育を修了しているのだが、それは彼のあずかり知らぬところであるし、明希は言おうとも思わない。

今のところ彼は私を田舎娘（神の加護付）と認識していて、否定し

ても無駄なのはもう分かりきったことであるし、実質明希に力やらなんやらが無くて彼は気にしないようであった。

明希の手にある封筒には大きな文字で入学案内、とある。文字が途切れているところがあるが、おそらくさほど印刷技術が進んでいないためであろう。

「国王陛下が授業料を免除して下さいました。学士院はみな16歳で入学するから丁度いいだろう、入学式は9月1日だよ」

明希は迷った。今すぐここで決定を下すのは難しい。これからの生活に大きく関わるものだから、よく考えてから決めたい。その上明希はこの学校について何一つ知らないのだ。

しかし、養父（というよりは祖父だが）は私が頷く事を信じて疑わないようである。

「少し、考える時間を頂いてもいいですか？」

明希は遠慮がちに封筒を受け取り、そつと胸元に引き寄せる。

「もちろんいいとも。決まったら言いに来なさい。——ああ、一年生には学科選択はないからね。入学してからゆっくり決めるといい」

彼は変わらぬ笑顔でそう答えた。

0 - 4 アイ・アム・エスパー？

かちやり、と万年筆を仕舞う音が響いた。窓を見やるともう月が高く登っている。

いや、月ではなくルテラ、と地平線に見えるのはルジイ、だったか。取り敢えず夜であることに変わりはない。

インクが乾いたのを確認し、パタリとノートを閉じた。上品な装丁のそれは、日記だった。

もちろん日本語で書かれているが、日付けは二つある。勿論日本と、ここスキラート共和国のものだ。

―― 7 / 28 (日)、8 / 5 (ス)

先程書いたばかりの文字がインクの滲み具合まで鮮明に思い出された。

この屋敷に来たのは丁度30日前の、日本時間6月29日だ。日記をつけ始めたのは、15日前。

毎夜こうして数えてはため息をつく。そうしてその後は無理矢理この国のことに意識を戻すのだ。

そうしなければ、自分を保てないのだ。だから出来るだけ、これからのことを考える。

例えば礼儀作法の授業を思い出したり、食事を思い出したり。

毎日こうするものだから、世間知らずの私につけられたやや顔色の

悪い教師は見る間に健康になっていった。

つまり私は優秀な生徒だったと言うことだ。

確かに褒められて味をしめたのもあるが、何より失敗した私にばれないように眉をひそめられるのが恐ろしかった。

きつと怒られるとどうすればいいかわからないと言うのもあったろう。

明希はこれに理由があるなど想像もつかなかったのだが、余りに非現実的な“日常”に現状を感謝しつつも享受する、という姿勢をとっていた。

物思いに耽る明希を、ノックの音が現実に戻した。

この控えめなノックはおそらく侍女だろう。

「お嬢様、ダニエル様が心配していらっしゃいます。夜更かしはお控え下さいませ」

少し空いた扉から人目をはばかりように声かけられた。明希は“お嬢様”と呼ばれてまた妙なむず痒い感覚に襲われた。

ともすれば笑い出してしまいそうだ。しかし彼女は至って真面目なのが問題である。

「シュリー、少し聞きたいことがあるんですけど……」

明希は、“さん”という言葉をどうにか飲み込んだ。——特に彼女は年上だから、どうしても明希を畏縮させてしまうようだ。

余りに日本人らしく言い淀んだ明希に、二十歳ごろの侍女は小さく礼を取った。

「それでは失礼致します」

シュリーは扉に向かって一礼する（軽く膝曲げるのだ）とするりと部屋に入ってきた。

そして明希の座っている丸いテーブルの向こう1・5メートルで立ち止まった。全く、毎回毎回計ったように正確だ。

明希は昼間渡されたばかりの白い封筒を取り出し、シュリーを呼んだ。

彼女は心得たように明希のすぐ近くに歩みよる。――どうやら明希は規格外だと認識してきたらしい。侍女^{ふじょう}ならあり得ないことだ。

「スキラート学士院でございますね。才能があれば誰でも入れますが貴族の間では一種のステータスのようなものです」

資料には華やかなガーデンや豪華な寮の絵が白黒で印刷されている。

「生物学科と天文学科に別れています。16歳から入学する留学生も居ますし、何より学士院出の泊が付きます」

流石と言うべきか、彼女は明希の知りたい事を正確に認識していた。シュリーはこれまで明希が“とても遠いところ”に住んでいたと知っている数少ない関係者の一人だ。

”どこ”かは誰も知らない。

――行った方がいい、いや、行かなければならない。

理由もないのに、そう思った。いや、もしかしたら感じたと言う方が正しいかもしれない。

この感覚を、誰が知ろうか。

現実を正しく脳で認識した瞬間、ハンマーで胸の真ん中を思い切り

叩かれたような気がした。

本当はこの封筒を受け取った時から決まっていたのだ。

明希は学士院に、いや、新たな環境に、何かを求めていたのだ。

（行かなければならない）

驚くことはない。ずっと昔から取り決められていた事なのだ。

明希は静かに決意を固めると、シュリーに礼を言った。するとシュリーは何か言いたそうにしながらもしっかりとした足取りで退出した。

明希は、実は長いものに巻かれているのに気付かなかったのである

0 - 4 アイ・アム・エスパー？（後書き）

そしてこんな初心者の小説にお気に入り登録して下さる方々ありがとうございます！

よろこびのあまり思わずベッドから飛び下り自殺しそうになりました。

1 - 0 日本人たるもの謙虚にあれ

言っておくと、彼女が直感したのは“なんかパパいつて欲しそうだし国王とかいつてるし行った方がよくね？”ということであろう。要約すると。

話はあるが、謙虚であるというのは日本人がもつ美德の一つだろう。

近年の話になるとまたややこしいのでここは一般論として捉えていただく。

基本的に敬語を用いる朴明希はその謙虚さを生かしてトラブル、メイドイン他人から逃れられるだろうか。

たれぞ知ろうか？

これでやっと、本題に入れたといえよう。ここまではあくまで、ただの、序章でしかないのだ。

1-1 旅のお供！ゲミもどき

次の日の昼過ぎ、落ち着いたところに入学を決定した旨を伝えると養父はすぐに入学届を用意してくれた。というより、用意してあったと言う方が正しいような気もするがまあいいだろう。

10日後、学院から承ったという書状と入学時に必要な物品リストが共に送られ、なにやら難しげなことが書かれた書類のようなものにサインして再び送り返した。

シュリーは少し寂しそうだったが、年末年始の女神の休日（と言うらしい）に帰ると言うのと、嬉しそうにご馳走を用意しておきます。と言った。

まだ荷物も揃っていないがまあ、そこはご愛嬌である。

その後も準備は着々と進み、あれよあれよと言う間に8月25日、つまり入学式の6日前になっていた。（1ヶ月はきっかり30日である）

無事に制服も届き、荷造りも終えた。日用品を詰めた大きな鞆は24日に馬車に積まれた。

筆記用具や日記、財布などを入れた肩掛け鞆は丈夫な革でできている。

25日に屋敷を出て、馬車で4日かけて王都の学院へ向かうのだ。

この馬車は言わずもがな屋敷の主たるダニエル・アークライトの所有するもので、トマスは熟達した馬のプロでありアークライト家唯一の専業（？）御者だ。

勿論馬車は一つしか所有していない。

残りは全部売っ払ったからである。

馬車に乗る明希は外の景色を目で追いつけていた。

制服の上品なロングスカートが小さく揺れる。コルセットの類を必要としない白のスカートはドレスと言うより、現代風のスカートに近く、紺のブレザーのような上着とよく合っていた。

明希の泊まるのは中流貴族用の宿はどれも綺麗で食事も申し分なかった。
アップバーミドル

道中は市を歩くこともなく、二日目には外をみるのもすっかり飽きしてしまったのだが、三日目からはかれこれ40年近くアークライト辺境伯に仕える御者のトマスがなにかとお菓子類を買ってくれた。

「お嬢様、見えてきましたよ」

柔らかなトマスの声に、最後のグミもどきを口に放り込んで、外の様子を伺った。

学生専用と思われる道は夜ということもあってか、静かで警備をする衛兵以外は人っ子一人居なかった。

小さな門をくぐった馬車は年若い衛兵の誘導に従って然るべき場所^{しか}に停車した。

明希はトマスが来る前に扉を開け、軽やかに地面に降り立った。

次いで座席の反対側にあった大きい方の荷物に手を伸ばそうとすると、荷物の代わりに衛兵とは違う軍服を着た青年がいた。

端正な顔をしたその青年は流れるような動作で馬車からおりると、鮮やかなブルーの瞳で明希を見据えた。

「はじめまして」

明希はそれに返答するように小さく会釈をする。
彼の手には明希の荷物があつた。

「私は特別棟とくべつとうの警備の総責任者、エドアルト・プライスレスです。
新入生のアキ・ホーノキ・アークライト様で間違いありませんね？」

彼——エドアルト・プライスレスは無表情のまま一息に言い切つた。

明希は一瞬呆けて、エドアルトが自分に質問したのに気付くと、慌て頷いた。

「あ、はい。そうです」

「それでは特別棟にご案内します」

エドアルトは間髪を入れずにそう言つと明希の鞆を持つたままさつさと歩き始める。

明希はトマスに目礼すると慌てて後を追つた。

1 - 2 緊急経路

エドアルトは明希の大きな荷物を持っているにも関わらず、まるで手ぶらでいるかのようにすたすた歩いていた。一筋のはぐれ色さえ許されぬ完全な黒を湛えた髪が歩調に合わせて揺らいだ。

おかげで明希は馬車を止めた場所から左にある門につくころには疲れはしないものの少し息を乱すはめになった。

門をくぐると西洋を彷彿とさせる左右対称に飾られた広めの道に出た。日が落ちかかっていることもあってか、道の両側には煌々と火が輝いている。

レンガのようなもので舗装された道は暗く、色までは定かではないが丁寧に敷き詰められていて暗いながらも高級感を漂わせていた。エドアルトの歩調は、緩まない。彼は迷うことなくしっかりと足取りで歩いていった。

やがて大きな建物の入り口に着いた。真下から見上げれば到底天辺など見えようもないその建物は、期待を裏切らず上品な石で出来ている。

入り口を警護する者が居ないことに少し懸念を抱いたが、学校にそこまでする必要もないのだろうと一人納得した。エドアルトは重い両開きの扉の鍵を開け、さらに進む。

特別棟はここなのだろうか？
寮であれば学生が放課後を過ごす場所であるというのに、ここには明かりひとつない。

真ん中を走る吹き抜けの廊下を歩きながら、明希は言いようのない不安に駆られた。

どうも、ここは寮というより、講義室の並ぶ校舎のように見える。

何しろさつきなんて長机に並ぶ豪華な（クッション付であった）椅子を見たのだ。……それも複数の教室^{へや}で。いや、彼を信用していないのではない。むしろこの学院になれた人物であるから信頼していたというほうが正しい。——しかし、である。

明希は肩にかけた白い革製の手提げ鞆から地図を取り出した。そして夕焼けの淡い光の中、慎重に地図を見る。

明希は特別棟を見つけるより前に、おそらく自分が通ったであろう道を発見した。火で照らされた長い道である。そこにはこう表示されていた。

緊急経路

その先の建物には講義棟^{こうぎどう}、とある。

その向こうには野菜園、温室、実験用広場（爆発物を扱う際には事前に申請し、この広場をご利用ください）、の文字。そして、行き止まり。

もうすぐ廊下も終わるところで、明希は確信した。

我々は、迷っている、と。

非常に遺憾ながら、これは変えようのない事実であった。

明希はこれを彼に伝えるべきか迷った。漆黒の髪を靡^{なび}かせながら颯爽と歩く彼の青い瞳はこの道が正しいと確信しているのだらう。

いやしかし、これは言わなければならないのである。いかなければ明希はこの広いキャンパスを散々歩きまわされることになるのだ。

おそらくすでに20も後半に入る彼には少々辛いかもしれないが大

人の対応をしてくれるだろう。うん。

初対面の人間に少し気が引けるが、仕方ない。まったくだ。

この間、コンマ一秒。

明希は地図を持ったまま小走りで前を歩くエドアルトに追いつくと、上がった息を収める暇無く口を開いた。エドアルトが歩みを止めなかったからである。

「あの、すみません。ここ、特別棟、と逆方向、では」

明希がそう言った途端、エドアルトはぴたりと歩みを止めた。

三秒、沈黙が流れる。その間明希はこれ幸いと息を整えた。

もともとたいしたものではなかったため、すぐ元通りになったことに安堵する。風通しのいい廊下に流れる冷氣のおかげで汗もかいていなかった。

「い、や。これはだな」

エドアルトは思わずといった風に口ごもる。慌てているためか、敬語も崩れてしまっていた。凜とした光を宿す、冷徹ささえ感じられた青い瞳は、悪戯が見つかった悪戯鬼のように泳いでいる。

やっぱ迷ってたんだ……。ていうか総責任者がこれでいいのか……？
言いようの無い不安が脳裏を駆け抜けた。どう考えても、人選ミスである。明希はもっと早くに地図を出さなかったことに後悔した。
今さら、なのであるが。

「そ、そうだ。この向こうに近道があるからそこを使おうとしたんだ」

（えええ！？そう来る！？まさかのパターンP！！）

断っておくとパターンPと言ったのはたまたまだ。偶然である。気分なのだ。そういうわけでパターンAからOはご想像にお任せする。明らかな言い訳に思わず心の中でツツコミを入れた明希は手元の地図に緊急経路を確認すると、なんとかして言い逃れようとするワルガキが傷つかないようになるべくさりげなく緊急経路に向かった。今度は、明希が半歩前を歩いて。このとき明希は異世界人物辞典のエドアルトの頁にすっかり、方向音痴と書き加えたのである。

念のため言っておくが、彼らが歩いているのは緊急経路であり遅刻魔の友、近道ではない。

1 - 3 エドアルトの受難

それから2、30分ほどかけて、ようやく特別棟とくべつどうに着いた。

扉が見えるあたりまで行けばエドアルトも自信をつけたのか明希の前を少々えらそうに歩き出した。自信をつけるのが遅すぎる上、初心者であるのに散々歩かされ、さらにえばられた明希は心の中でエドアルトの端正な顔をタコ殴りにするのを想像して我慢した。

空気を読め！現代日本人！これぞ処世術。沈黙を読み取るのだああ！

だああ！

だああ……！

心の叫びが明希の中でエコーした。

ここで空気を読んでいないのは向こうだと言ってはいけない。それは気付いてはいけない事実なのだ。

……嗚呼、気付いてしまった。

とりあえず親しくなったらあること無いこと噂にしてやろう、と明らかに彼の行動に見合わない報復を心に留めて気を落着けた。勿論もちろん今後親しくなる予定は未知数、というよりゼロに近い。

つまり実行に移される可能性もゼロに近い。

今度こそ正しい扉を開けると、外との落差に一瞬くらりとするほど明るい光が瞳の奥を突き刺した。

これは寮か？と疑うほどに豪華絢爛な玄関口である。

何より明希を驚かせたのは光るガラス状の明かりであった。まるでシャンデリアか何かのように明るい光を放つそれには、電気コードも付いていなければ、火が灯されている様子も無い。貧乏を体現していたアークライト家では一生お目にかかれないもの、非常に高価

な光石だ。^{しつせき} この国の北に位置するシュミット山脈から採れる輝石である。

玄関から扉を抜けるとこれまた学生寮に似つかわしくない広いホールに着いた。今度は明希がじつくりと部屋を見渡す前に目の前に長身の青年が現れた。

エドアルトより幾分か高い位置にある彼の目は優しく薄い茶色で、光の当たり具合で金色にも見えた。瞳より少し濃い栗色の髪は男性にしては長めで、襟足が肩にかかっている。

寸分の隙もなく着こなされた制服は彼の醸し出す高貴なオーラを一層引き立たせていた。

エドアルトが胸に拳を当てて礼をとったので、明希もあわててぺこりとお辞儀をした。長いものには巻かれよ。

すると前方斜め上方向から、ふっと息を吐き出す音がした。ため息をついているようなものではなく、思わず出てしまったという様子で、当の青年はその薄い唇に笑みを佩^はいていた。

「ものすごく遅かったね、エド」

彼の口調は嘲笑うというよりも、からかっているようであった。そしてそれに反比例して、エドアルトの機嫌が降下してゆく。

腹が立つと言いたげなその顔はさつきとはうって変わってかなり怒っているように見えた。明希は思わず弁解しようとした。

しかし、エドアルトはその表情のままで礼儀を保ったまま罵詈雑言を浴びせた。おかげで口調が変になっている。

「黙りやがって下さい殿下。ガキのくせにいちいち聞くな……お聞きになりやがらないで下さい。この生産性のかけらもないと阿呆……

…殿下」

栗色の髪の青年——殿下と呼ばれていたのでおそらく王族であろう——は今度こそ額に手を当てて肩を震わせた。おそらく彼の頭の中には散々一緒に歩かされた明希のことは一滴もないのだろう。明希はひそかに彼を敵認定した。

エドアルトは忌々しそうに舌打ちをする。

別人にも見える彼の態度に明希は驚いた。迷子がばれた（もしくはばれそうな）時とは大分違う。にわか多重人格だろうか？

「アークライト、知ってるとは思うがこちらはスキラート共和国第三王子クローゼ・アティラン・レイ・スキラート………様だ」

エドアルトは最後をものすごく言いたくなさそうに付け加えると、金に近い茶色の目がまぶしいクローゼ・アティなんとか・スキラート殿下に私のことを軽く紹介した。

少し驚いた様子のクローゼ・アティなんとか……嗚呼面倒だ。殿下でいいか。

その殿下に、逆にエドアルトが驚く。

「知らなかったのか？先に文をやらせたはずだが……」

エドアルトは敬語を使うのをやめたしまったようだ。そういえば妙に親しげに殿下と話すし、いったい何者なのだろうか？というかそもそも何で王族がここに居るのだろうか？

私がこれから向こう三年暮らすところ、つまりここは学院の女子寮であるはずなのだ。

「ああ。また父からかと思って見ずに捨ててしまったのがあったよ
うな気がする。あれかい？水色の封筒の」

エドアルトが苦虫を噛み潰したような顔をする。どうやらその封筒で間違いないようだ。

ちゃんと見るよ……。と言うその顔は彼が普段いかに苦勞しているかを表していた

そんなエドアルトを華麗にスルーすると、殿下はさりげなく明希をホール中央のソファに誘った。意気消沈するエドアルトも後に続く。

「アキ、長い間歩かされて疲れただろう。新入生が来るのは知っていたんだけど女の子だと思ってなくて心無いことをしてしまった。ごめんね」

「い、いえ。大丈夫です」

明希は日本人スキル”謙遜”を発動した。——そんなテロップが脳内画面の下部に流れた気がした。何しろぜんぜん大丈夫ではなかったからだ。

1 - 4 王子現る

ソファに座った殿下は完璧な笑顔で微笑んだが、明希は講堂でぶっつけ本番にスピーチをするくらいには緊張していたのでろくに目には入っていなかった。

「特別棟へようこそ。ここは王族とか留学生くらいしか居ないから今は僕ら二人だけど、4月には留学生が来てにぎやかになるからね」
にこやかに告げる殿下に明希は目だけで相槌を打った。自分は王族でも留学生でもないのだが、国王の推薦ゆえということなのだろうか。ていうかそもそも王子と同居ってどうなんだ。問題だろう、かなり。

しかし殿下は何の疑問も感じていないようだ。大丈夫か、この国。

「学年は僕がひとつ上だからあまり会えないけど、秋学期は創立記念パーティーとかもあるし楽しんでね」

「あ、はい。わざわざありがとうございます……」

明希が礼を言うと殿下は満足げに頷くような仕草をしてエドアルトに”後は任せたよ”と言うと席を立った。エドアルトが挨拶するのにつられて明希も座ったまま”おやすみなさい”と言った。殿下は立ち去る時も爽やかな笑顔を残し、栗色の髪を靡かせた。
最後まで完璧な王子っぷりである。

殿下が奥の階段へ消えたのを確認すると、エドアルトは半ば弁解するようにはそぼそとしゃべりだした。

「すまない、旧知の仲なものだから思わずいつもの調子でやってしまった。不快にさせたなら謝ろう」

「いえ、大丈夫です。気にしてませんし、友達なんだったらいいと思います」

エドアルトはブルーの瞳を少し伏せると”そうか……”と言って立ち上がった。そして部屋に案内するから付いて来い、とだけ言うことすたすたと玄関に向かつて歩き出した。

明希はあわててエドアルトの服の裾をつかむ。

「階段は、あっちです!!」

「……すまん」

そういうとエドアルトは体を180度回転させて再び歩き出した。明希はこれ幸いと質問をぶつける。

「あの、私本当にここに住むんですか？」

「そうだ。殿下の部屋とは階が違うから大丈夫だろう」

エドアルトはこともなげに言った。しかし声を大にして言いたい。何が？と言うかどの辺が？何で？

いや、まかり間違ってもそういったことはならないと思うが王族がどこの馬の骨とも知れない……いや一応知れてるか。貧乏辺境伯の幼女だし。いやいや、だまされるな。国王陛下、考え直して下さいこのやる！。きっと今頃大臣はらんでぶ！。

明希が悶々と悩んでいる間に目的地に付いたようで、エドアルトに

渡された鍵で部屋の扉を開ける。

二十畳はありそうな部屋に入るとエドアルトはベッドの脇にかばんを置いた。そういえば彼はずっと明希の鞆を持ってくれていたのである。

エドアルトはまた明日、と言うと明希に背を向けた。明希はエドアルトに向き直る。

「ありがとうございました！え、と……エドアルトさん」

「エドでかまわない」

「あ、じゃあ私のこともアキで……」

エドは後ろを向いたまま明希と会話した。そして明希から見れば後姿のままうむ、とばかりに頷くと今度こそ部屋から出て行った。

明希はエドが出て行くと、鞆の中から寝間着を取り出し、部屋に備え付けられたシャワー室のような風呂に入った。水が引かれているのか、レバーを押すと暖かい湯が出る。くみ出し式の様であった。天然の素材で出来た石鹸で体を洗うと、長時間歩いた疲れがどっと押し寄せてきた。

この国は産業革命以前のヨーロッパよろしく、下着は体にピッタリしたドレスや、レギンスのようなものばかりで、たまりかねた明希はシュリーに駄々をこねていわゆる紐パンなるものを作った。（これは様々な葛藤の末仕方なく行われた。ゴムが手に入らなかったし、普通のは縫いにくい）

ブライズ（例のレギンスもどき）にロングスリップを着る。これがこの国の一般的な寝間着だ。しかしジャージと違って外に出る時は上着を羽織らなければならない。

明希は今にも眠りに落ちそうな体を叱咤して鞆を片付けた。
ようやっと片付け終わるとベッドサイドにあるテーブルに学院長か
らの書状が見えた。

——曰く、栄えある五人目の女生徒の入学を歓迎します、と。

1 - 5 緑のおかつぱ

朝、着替え終えた明希は食堂の椅子に座って、地図を眺めていた。このやたらと広い学院は奇妙な場所がたくさんある。もちろんこの豪華な食堂も学院内のものだ。ちなみに入学資料にあった食券をありがたく使わせていただいている。

本当は図書館を探すつもりだったのだが思わず見入ってしまった。しばらくはこの地図のお世話になりそうだ。

明希は気を取り直して簡易ノートと羽ペンを取り、地図を片手に講義棟の隣の図書館へと向かった。

図書室には生徒がちらほら見えた。夏休み後半は寮が開放されるので家が遠い生徒などは早めに寮に入ることがある。

もちろん男子生徒ばかりで、明希は視線から逃れるようにして人の少ない参考書の棚に向かった。立っているのがどうにも居たたまれないので、目に付いた本を手にとるとそそくさと人気の少ないテールの端に陣取る。

手に取った『スキラート学士院の歩み』と言う本は言わずもがな、退屈極まりないものだった。

現在16歳以上25歳未満なら誰でも入学できるこの学院は、もともと王宮の文官を育成するためのものであり、卒業生のほとんどは役所務めか研究所行きなのだ。どうりで女生徒が少ないわけである。しかもほとんどの生徒が15歳までに学院付属の”学園”と呼ばれる施設で勉学を修めており、その後家業や、遊学などを経て学院に入学している。つまりほとんどみんな年上なのである。

明希がたたらと卒業生の遍歴を斜め読みしていると、突然背後か

ら声をかけられた。驚いた明希は思わず本を取り落とすところだった。意外と本に熱中していたらしい。

「新人生だよね。その本、面白い？」

男性にしては高めのテノールが耳をくすぐった。振り返ると鮮やかな萌黄色のおかっぱ頭が視界に飛び込んできく。明希が曖昧な返答をすると銀縁眼鏡のおかっぱはなにやら嬉しそうに語りだした。

「この学院の歴史はとても古いからね。その本には正史では語られない所謂裏歴史の片鱗がちらほら見えるんだ。教科書に載っていないこの国の歴史を紐解くのはとても楽しいよ」

うだうだうだ。なにやら小難しいことを語りに語っているのだが、明希の視線は頭に釘付けである。ちらりと横目で図書館を見渡すとファンシーな髪色が正統派よりも圧倒的に多いのがわかった。今まで注意を払わなかっただけに驚きが多い。

異世界はカラフルである、と辞書に追加された。

ふと、目の前の彼と目が合う。そういえば名前も知らないな、と明希が思っていると彼は萌黄色のおかっぱを揺らして急に慌てふためいた。

「ああ、ごめん。今までそれ読んでる人なんて居なかったからつい嬉しくなっちゃって。ええっと、僕アラン・オデライト。アランって呼んで。君は？」

明希はうつかり間違わないように少し考えてから答えた。

「えと、アキ・アークライトです。アキって呼んでください」

「わかった。アキだね」

そう言うのアランはにっこり微笑んだ。髪ばかりに気をとられていて気付かなかったが、アランはとても綺麗な顔立ちをしていた。綺麗と言うか、女性受けしそうと言ったほうが正しいのかもしれないが。

アランは同志でも見つけたと思ったのか目をきらきらさせている。もちろんアキは裏歴史を紐解く気などさらさらないが、彼にとって重要なのはこの本を手にとったことであるらしい。

「学園出じゃない上に16歳から入るって珍しいから気なってたんだ……」

アランはまだ何か言おうとしていたようだがそれは言葉として紡ぎ出されることはなかった。代わりに彼より幾分か低めの声がテーブル越しに掛けられる。

「すまん、少し付いてきてくれないか？」

見慣れた黒い髪、エドだった。

「あ、はい。……ごめんなさい、また今度」

後半はアランに向かって言う。彼ははつとしたように何度か頷いた。エドの登場に驚いたようだ。

アランは”片付けておくよ”と言って『スキラート学士院の歴史』を手に取ると本棚の間に消えていった。

明希とエドが去った図書館で黒い何かがにやりと笑った。

1 - 5 緑のおかっぱ（後書き）

P、P V 1 万突破しておりました。

はわわ……ありがとうございます！

そろそろ番外編の準備をはじめます……

1 - 6 ひびき、そしてストーカー

明希はエドにつれられて図書室の個室に向かった。より集中するために作られた部屋は意外と広く、四畳半ほどの空間に机と長椅子が二つ備え付けられたものだった。

エドは 明希と向かい合って座るとおもむろに丁寧に包装されたブレズレットを取り出した。

銀色の輪のシンプルなものであったが、それに刻まれている意匠は緻密で明希は思わず見入ってしまう。

エドは少し不機嫌そうにそれを手渡した。

「身分証明みたいなもの。寮から出るときは携帯が義務付けられている。これを見せれば王宮図書館にも出入りできるからなくすなよあと、学院長から預かってきた学院手帳だ。これは鞆にでもしまっておけ」

「ありがとうございます」

「い、いや。今日渡せてよかった。それだけだ」

明希はエドの言葉に疑問を持った。なぜわざわざここに連れてきたのだろう。図書室でもよかったと思うのだが。

「あの、なんでここに？」

するとエドは決まり悪そうな顔をしてガシガシと頭を掻いた。次いで長いため息を吐きながら頭を垂れる。黒い髪が耳の上でさらりと流れた。

明希がそろそろ寝たんじゃないかと心配するころ、エドは人生を諦

めた老人のような顔をして顔を上げた。今にもポツクリいきそうだ。

「クローゼから預かってきた。はっきり言っておくがロクなもんじやないだろう。俺が保障してやる。……チッ。とりあえず一人のときに読めだ」と

明希は封筒を受け取った。封筒の向こうから”あははーうふふー”と聞こえて来そうなそれを受け取って明希は思わず口をへの字に曲げる。何だこれは。

“渡したからな！”と言うとエドはそそくさと出て行った。立つ鳥は後を濁しまくって去ったのだった。

微妙に、微妙に香水の甘ったるいそれが鼻に響く。どう考えても殿下が託した手紙とは思えないのだが。

明希はくるりくるりと紐でとめられた手紙をといて中を見る。そして後ろ暗いことは何もないのに思わず辺りを見回した。

明らかに殿下ではない女性の名前がサインされた便箋は女性の筆跡で殿下に対する重すぎる愛が便箋4枚に渡って滔々^{とうとう}と語られていた。これはいったい何の嫌がらせだろうか。少女ロザリー（文脈から少女と判断した）は強烈な愛をひたすら書き綴っているのだが、明希が持つていても意味がない。

暗号がないか文章の頭文字を読んだりしてみたが時間の無駄にしかならなかった。殿下は何を思っただけを私に託したのだろうか？少なくともこれは明希が持つていても仕方がないので夜にでも殿下に渡さなければならぬ。

エドの予言は、当たっていた。

彼女は珍しく図書室にむかっていた。お告げがあつたからである。

彼女の姿を見た生徒は、ひいいつ、と言って次々に道を開けた。彼女は堂々とそこを通った。

彼女は光が嫌いである。だから光石がまばゆいばかりに照らし出す廊下を歩く時は必ずローブを着てフードをかぶっていた。闇に包まれると彼女は安心した。

「うふふ……」

彼女の口が弧を描いた瞬間、ざざあつ、とさらに道が開いた。

長いローブがさわさわと衣擦れの音を立てている。彼女はこの音が好きだった。この音を聞くためにローブを特注していると言っている。

しかし彼女はそれがさらに愛すべき(?)級友たちを脅かしているとは知らなかった。

そんなことはどうでもいいのだ。

なぜなら彼女は今日も今日とて趣味の女の子観察を愛用の手帳とともに
行おうとしているのだ。

彼女は現在進行形で恋する乙女な、とある生徒をある意味ストーキング中であつた。いやもうすでに犯罪行為であろう。

しかしこの国に『ストーカー行為等の規制に関する法律』はない。正式名称なのはご愛嬌である。

「図書室なんてお呼び出したに違いないわぁ」

彼女は実に怪しいことをつぶやくと、こそこそと図書室に入っていた。そして彼女は、全く違うものを目にするのである。

1 - 7猫と手紙がアイテムボックスに追加された

明希は図書室に居るのを諦めて、特別棟に戻ることにした。夕食に近い昼食を摂ると、元来た道を帰る。この分では夕食を食べるほどお腹は空きそうにない。

なぜかわからないが道中ちらほらこちらを見て泣きそうな生徒を見かけたがそんなに怖いものでもあったのだろうか。

部屋の前には小ぶりのおしゃれなトロツコが置いてあった。荷物を置くところが家の形をしている。

屋根の部分を持ち上げると、案の定教科書とリストが入っていた。

そして鍵を開けて部屋に入ると、突然小型のもふもふした物体に飛びつかれた。

「うっ」

喉に変なものでも詰めたかのような声が出た。

二、三步よろめいて改めて開いていた左手で半ば抱きしめるように原因を捕まえると、それはいかにも哀れっぽくみゃあ、と鳴いた。

「猫……」

明希は誰に聞かせるでもなくそう呟くと、深い藍色の猫の首元をつかんで床に下ろし、部屋の鍵を閉めた。

リストを確認して備え付けられたデスクの本棚に教科書を仕舞っていく。

歴史学、薬学、大陸生態学、海洋生態学、天文学、幾何学、能力学の七科目で、一週間五日の内休みが一日、一日一時間講義四コマだ。

科目に偏りがあるのは仕方ない。芸術が学びたいなら南にあるナールファイン、農林業なら自然豊かで国土の広い南のコンテクロープの学校に行く。

一通り片付け終わるとぼふん、と勢いをつけてベッドに座った。単独で狩をする習性から遊ぶ以外あまり人に寄り付かないはずなのに、藍色の猫はとてとと明希の膝によじ登ってきた。

野生の猫にしてはシャンプーをしたばかりのようにふわふわした清潔感のある毛並みだ。

「どこから来たのかねえ」

鍵も閉まっていたはずなのに……、明希はひっそりと呟いた。

それからしばらく窓の外を眺めながら猫と戯れたり教科書をパラパラめくってすごした。こうしてみると向こうでの生活とあまり変わらない気がした。

頭をぶんぶん振って懐かしい記憶を無理やり頭から追い出して、ごまかすように窓の外を眺める。

だんだん赤くなる空——この国の夕日は地球よりずっと赤かった——を眺めていると、遠くに小さな人影を見た。

人影は建物の正面ではなく、明希の部屋の窓のある東側の小さな扉から入っていった。

待ち人きたるかな。

クローゼ殿下であった。

明希はこれ幸いと例の手紙を手に階下へ向かった。

「殿下ッ」

「おや、出迎えてくれるなんて嬉しいね」

「いえ違います。えーこのエドに渡された手紙なんです、これは、えーっと……殿下宛のもので。……あの、何で私にこれを？」

例の手紙を受け取ると、殿下は少し驚いて”ああ、間違えた”と言うとごそごそと服を探り、とうとう内ポケットから似たような水色の封筒を取り出した。

（こんなところにあつたのか、と呟いた。本気で間違えたのであつてこの手紙を私に渡す意味はなかったようだ）

「ごめんね、封筒が似てるから間違えてしまった。父上からの手紙なんだ」

「ありがとうございます」

「たいしたことないよ。……でも殿下って呼ぶのははやめてほしいな。僕の周りは殿下だらけだから、少し混乱する」

「あ……、すみません」

「いや、そんなに気にしてないよ」

学校には殿下……クローゼ殿下しかいないし、エドも殿下と呼んでいたが、まあ本人にそう言われればそうするしかない。せつかく殿下という呼び方に慣れて来たところなのだが仕方ないだろう。

明希は短く挨拶だけすると踵を返した。

1 - 8 ストーカー再び

彼女は特別棟にいた。特別棟のロビーの、棚の中にいた。

中は比較的暗いのでフードは取ってある。そして鍵穴からエモノを覗いていた。

「あの黒い髪、直視できるそこその顔、完璧すぎるわ……！！茶髪ヤローになんて渡さないから見てなさい！！」

彼女は押し殺すように呟いた。学院の生徒で、きちんとした身分もあるのだから、適当に理由をつけて会いに行けばいいのに、彼女はそんなことはまったく考えなかったのである。

棚は比較的、明希とクローゼの近くにあったので、彼女はしっかりと二人の会話を聞き取ることが出来た。

言うまでもなくこれは犯罪行為である。しかし彼女は気にしない。

ああっ、あの手紙！知っているわ！ロザリーが8月19日にあのヤローにわたしたやつよ。確か貸し出した図書室の本に紛れ込ませたやつね。

……ふん、間違えたなんてうそだね、これは。彼女の反応を確かめたかったのよ。うーんテストみたいなもの？

はっ、つまりこれは第一関門突破だわ！つまり彼は心の中では、”まあフツーに付き合ってやらんこともない”とか思っているに違いないわ！

その程度にしか思っていないくせに私より早く言葉を交わすなんて

なんて図々しいの！

こつ今度は殿下と呼ぶなとかいいやがっっていますね。なんと呼べばいいかわないあたりがいかに怪しすぎるわ。……妥当なのはクローゼ様かしらね。良家のお嬢様ならはじめからそうだけれど……。そもそもはじめに殿下って言うのがちよつとおかしいのよ。堅苦しくって。もしかしておうちの方は軍に勤めているのかしら？

……調べなくてはならないわ。ふふふ、私に不可能ないわ！！

彼女は無言で悔しがったり怒ったりと傍から見たらいかにも怪しい（棚の中なので誰も見ていないが）行動をしていたが、玄関から誰かが入ってくる音がすると静かに姿をくりました。

「今、その棚の辺りに誰かいなかったか？」

玄関から入ってきた男——エドアルトが言った。

「いや、私と明希の二人だった。……そもそもここに寝泊りしているのは我々三人だけだろう？」

「確かに気配はしたんだが……それにしても薄かったしな、見逃しそうなくらいだから気のせいかもしれない」

エドアルトは棚を眺めながら言った。

クローゼはエドアルトの視線を追い、棚にたどり着くといやそうに

顔をしかめた。

「何かあるのか？」

クローゼは不機嫌そうに棚に歩み寄る。心なしか歩き方も乱暴だ。

「この棚はな、外に出る仕掛けがあるんだ。これ以外にも仕掛けは大量にあるから知らないだろう？」

「……兄君か」

「そうだ。あのいまましい頭に花を咲かせたような奴だ」

クローゼは珍しく不機嫌さをあらわにしていた。それだけ気を許せる相手だと言うことだろう。

本人は気付いているかはわからないが、どこか心のよりどころにはしているはずだ。学校の七不思議に加えられたなどとぶつぶつ言っているがそれはそれで本人が楽しんでいる節があるので文句を言える立場ではないだろう。

そしてまだ太陽が沈みきらない頃、西の空にルテラが現れた。

1 - 9 猫の正体

明希は早足で自分の部屋に向かっていた。手紙に書かれていたことが衝撃的過ぎて、動悸が抑えられない。

この学院に入ったのは果たして好かったのだろうか。この手紙を読んだ今、明希は答えを持っていなかった。

君がこの学院に入ってくれたことを嬉しく思う。私が君をこの学院に推薦し、特別棟に住ませたことには理由がある。
私は知っていると言うことだ。

私は知っている。

この手紙が君以外に渡る可能性も考えて、ここでは詳しいことは語れない。

だから入学式の前日、信頼の置ける私の部下に説明させることとする。すでに話は通してあるので、朝食を食べたらすぐに王宮図書館に行つてクリステイアン・クリスタライズと言えば通してもらえはすだ。

その時、ブレスレッドを見せるのを忘れずに。

君の未来に幸の大からん事を

ヘンリー

何を知っているか、書かなくてもわかる。”どこから来たか”だ。

間違いない。ここではこういった現象がよく起こるか、私があることを知っていた——つまり（彼らにとって）しかるべき手順を踏んで私がここに存在したるものとしたかだ。

おそらく前者のほうが可能性としては高い。後者ならば、この学園にいればとも”その人物”であるとして伯爵邸まで馬を走らせればよいのだから。

しかし考えれば考えるほど頭が混乱して、どれが事実なのかわからなくなってきた。やはり自分はこのいうのにはあまり向いていないようだ。

しかしブレスレッドを見せれば分かるというのは不思議なものだ。今日見た限りでは他の生徒とさして変わらないように見えたが、目に見えない何かでもあるのだろうか。

これもまた、考えても意味を成さないことであつた。

明希は考えるのを諦めて小さくため息をつく、ドアノブに手を掛けた。

それから扉を開けて、目の前の光景にぶつ飛びかけた。そして一瞬の後、しかるべき行動に出た。

「お、おじゃましましたー」

がちやり、と扉の閉まる音がした。

明希はゆっくり辺りを見回す。間違いなく自分の部屋だ。鍵は？持っている。さっき開けたのだからきちんと閉めたのも間違いない。

……誰？

いや、見間違いかもしれない。扉を開けたら深い藍色の髪の人が、

しかも成人（しているであろう）男性がいたとか幻だ。間違いなく幻だ。間違いなくどう考えても見間違いだ。今日はいろんなことがあったので疲れているだけだ。

明希は心を落ち着けて再び扉を開けた。

間違いなく、同じ光景が目の前に広がっている。静かに扉を閉めた。

「あー、すみません、どちら様ですか？」

アラブ系の民族衣装を思わせる服を着た青年はうつすらと笑みを浮かべる。そして私をベッドサイドの広いテーブルについている椅子に誘った（私の部屋なのに）。

「すまないな。我の名はキルス・カルペンティエールだ。……そう不審な目で見るな。説明しよう」

1 - 10 もふもふ

「その昔、この大陸は我ら猫の一族のものだった。我々の本性は猫、ただし実体を持った幻の。ゆえに自在に姿を変えることも出来た」

青年はゆつくりと紡ぎ出すように語った。覆いの取られた光石が彼の藍色の髪を綺麗に照らし出している。

「500年ほど前、我々の初めて見る知能を持った者——ヒトが大陸の西に現れた。我々は彼らの姿を模し、歓迎し、交流を持ってやがて我々は婚姻によっても結ばれるようになった。彼らは我々の知らないものをたくさん持っていた」

明希はアークライト邸での授業を思い出した。猫の一族——アイリオはその血が濃いほど予知の力に優れているが、純潔は絶滅したとかどこかで生きているとかいろいろ言われるのだ。

「長い時の中で我々は多くのものを失った。まず、猫とヒトにしか変態できなくなり、純血でないものは変態すら出来なくなった。そして純血でないヒトは猫の姿の我々と会話が出来なくなった」

もしかしたらガーデンにいた白い猫はアイリオだったのかもしれない。いや、おそらくそうだろう。

そして私は、言うまでもなく、純日本人のド平凡な顔をしている。

「その後も何度か”Earth”からヒトがやってきたが、人数と回数は次第に減っていった。お前は80年ぶりだ。純血のヒトが現れればその地方を束ねるものが挨拶に行くのが通例だ。然るに我が在る」

明希は聞いたばかりの言葉をゆっくりと咀嚼し、頭の中で整理した。

「あ、私はアキ・ホーノキです。……あの……帰る方法がありますか？」

「ないな」

「……え」

「我らはヒトより記憶力に優れる。ゆえに書がなくても純血のヒトの訪問についても様々な研究がなされたことは知られているし、研究が意味をなさないことも分かっている。予知の一族でもあるからな」

ふうー、とアキは長いため息をついた。確かに覚悟はしていたが、改めて言われると堪える。けれどもなぜか遠い場所で起こっていることのように、現実味がなかった。

フィルターを通して見ているみたいだ。

「辛いかな？」

低い地に響くような美声が空気を震わせた。

「そうか」

そういうとキルスはもそもそと私のベッドにもぐりこんだ。

「ちょ、ちょちょ。何やろうとしてんですか！」

「睡眠だ」

「私のベッドなんですが」

「知っている」

「いえ、そういう問題じゃないですよ！私どこで寝たらいいんですか！？」

あいにくソファは部屋にない。

「ここで寝ればいい」

「ええ！ていうか家帰ってくださいよ」

「無理だ」

「なんです！？」

「海の方こうにある。船が出るのは年に二度。7月10日と8月20日だ」

「どんな辺境ですか、それ」

アキはがつくりうなだれた。何を言っても無駄らしい。

「じゃあせめて猫になってください」

そう言うとキルスは不思議そうな顔をした。

「……そうか？まあかまわんだろう」

アキが安心して風呂から帰ってくると、ベッドには藍色の猫が横たわっていた。

こうして寝付くまでの短い間、アキは存分にもふもふを楽しんだのである。

1-11 呟くおかつば、地下への挑戦

朝、アキが用意を終えた頃にようやくキルトは起きだした。彼をどう扱えばいいのかいまいち分からないのだが、当の猫は寝ぼけ眼でふらふらと浴室に向かっている。

とりあえず行き先だけ告げると、洗濯物を籠に入れて荷物を手に食堂に向かった。

食堂はあまり人がいなかった。昨日と同じ視線がちらちらと向けられているのが分かる。

相変わらず豪華なメニューに目を細めると給仕の女性に食券を手渡した。

「ベビリーフのサラダと魚のミニスープ、チーズパンでございます」

トレイを受け取って席に着くと、見覚えのあるグリーンの髪が目の前で揺れた。

「おはよう、アキ。昨日はあまり話せなかったから。会えてよかった」

「おはようございます」

アランはアキの前の席に座ると、パンを手を取った。細身な彼には似合わないほどの量の食べ物がトレイに載っている。

アキは少しうらやましく思いながらスープに手をつけた。

「昨日のあれ、あの鉄面皮隊長って何の用だったの？」

「……エドのことですか？」

「あ、あだ名呼び」

アランはひくりと頬を引きつらせた。少々失礼ではないだろうか。と言うかエドは何でこんなにびびられているんだ。

「それなら生徒手帳と、身分証明の」

「ああ、ブレスレッドか。なるほど、留学生は王宮の管轄だから……」

アランは再びぶつぶつと呟きながらパンを口に押し込んだ。彼は何かと呟く癖があるようだ。

アキは気にせず最後のベビリーフにフォークを突き刺した。

まあ言わなくても勝手に分かってくれるので助かるが。

王宮図書館は学院からそう遠くない場所にあった。学院とは比べ物にならないほどのマンモス図書館に、アキは目を白黒させながら中に入った。

一階の受け付けの男性に用件を告げると、見取り図を渡され、地下

7階の右奥の部屋です、とだけ言われた。案内はしてくれないらしい。

はたして階段は長かった。残念ながらエレベーターもエスカレーターもない。それよりこんな地下深くに司書室を作ったのは誰だ。外と違い、地下はひんやりとしていて心地よかった。しかしだからといって地下7階なんてものを作っていい理由にはならない。

光石の明かりで明るいとはいえ不気味すぎる。しかも人の気配が全くしないあたりがさらに怖い。

ここで誰かに脅かされればアキは一目散に階段を駆け上がっただろう。

アキは丁寧に幾何学模様が彫られた木製の扉を控えめにノックした。

「すみません、クリスタレスさんいらっしゃいますかー？」

「どうぞ」

聞き取りにくい細かい声が扉の向こうから届いた。男性のようなのだが、声がまるで今にも死にそうな人のように聞こえる。……不気味だ。

アキは一瞬のためらいの後、そつと扉を開いた。

1-12 棺桶、のち大事なお話

扉の向こうには男性がいた。しかも全体的に色素が薄い。ものすごく薄い。

しかもなぜか、棺桶に挟まっている。

彼は上半身を棺桶に食われたまま言った。

「すみません棺桶の蓋を上げるのを手伝ってくださいませんか？」

「あ、はい……」

何で棺桶があるんですか、とかなんで挟まっているんですか、とかその壁から生えているライオンの首は何ですか、とかいろいろ聞きたかったのだが、とりあえずアキは彼の脱棺桶を手伝った。

彼の体は驚くほど細く、棺桶につぶされていなかったのが奇跡にも思えた。

その容貌はどこか女性的で、幻想的な銀色の髪とあいまってより彼を幻想的に見せている。

アキはクリスタレスに促されて席に着いた。木でできたカップは素材を感じさせないほど繊細で色鮮やかな模様が彩られ、不透明なガラスのような素材で塗りこめられていた。

部屋は見回せば見回すほど奇妙に見えた。ここまで統一性のない部屋にはなかなかお目にかかれないだろう。

やがて書棚を漁っていたクリスタレスはなにやら丁寧に保護された一枚の書面を取り出した。アランよりは短めの髪をさらりと払う様子も絵になっている。

「国王陛下のお手紙はありますか？」

「あ、はい」

アキは手提げかばんの中からケント紙ほどの硬さのファイルを取り出した。硬い紙でプラスチックの代わりをしているのだ。

クリスタレスは手紙を受け取ると、似たようなものが整然と仕舞われた入れ物に同じように仕舞う。この手紙は一時的な身分証明であり、御璽のない親族以外への手紙はこうして集められると言う。

もちろんめつたにないのだが、悪用されないためだそうだ。仕方ないとはいえ自分に宛てられたものが取り上げられるのは少し寂しい気がした。

しかしクリスタレスはお構いなしに用件を伝えた。

アキラ”純血”は国王の名において、不当な扱いを受けないこと。

”純血”信者（生存する純粋な人間はアキのみだそうだ）から守ること。

それと引き換えに、時が来れば王宮に顔を出し、スキラートのために何かしら貢献すること。

「時っていつですか？」

「あなたがここになじんだ頃ですよ。それに二ホンジンは頭がよいと聞きました。現に学士院にも行かれるのですし、文官になるのもよろしいかもしれません」

アキは思わず目を丸くした。それは二ホンジンと分かることと、女性であるアキに文官を進めたことだった。

今までの様子から男尊女卑社会だと勝手に決めかかっていたのだ。クリスタレスは予想していたようにくすりと笑った。

「76年前にこられたフミヨという印刷を発明した方が、晩年に学問好きの孫娘のために大演説をして、いろいろなところに働きかけたのですよ。学士院に女性が通えるようになったのは5年前で、たしかお孫さんも通っていらつしやると聞きました」

「その人は……」

「ニホンジンです」

クリスタレスはアキの言葉の先をつなげた。彼女はアキと同じ”純血”で、はじめは芸術の国、ナールファインのアイオーネ——純血信者——に監禁されていたという。

「まあ彼女含め先達の行いが今あなたがこうしてこの国でやっていける理由なのです。それにしても落ちたところがアークライト辺境伯のところですよ。あなたを彼の養女にするよう取り計らったのは私の兄なんです。」

「あ、ではよろしくお伝えください」

アキは脳内に”日本人的受け答えの作法”と言うタイトルの本を片手に小さくお辞儀をするような仕草をしながら言った。

1 - 12 棺桶、のち大事なお話（後書き）

お気に入り登録がとうとう100に！ありがとうございます）^o^
^
♪

1 - 13 日本食？

その後もクリス——クリスタレスは当主の継ぐ名らしいのでそう呼ぶことになった（本名は教えてくれなかった）は穏やかな笑みを浮かべながら歴代の”純血”についての講義をした。途中から語りになっていて、三人目のイギリス人家族の話辺りから飽きてきたのだが、アキは辛抱強く聞いた。

先代、文代さんとその弟公彦さんは大阪万博に行く前日にここに来たそうだ。ばらばらの場所に着いた二人だが、スキラートの公爵家に拾われた弟が無事に姉を探し出したのだと言う。

この話の合間にちらほらとクリスの家族の話やスキラートの近代史に触れた。

アキは大まかな歴史は知っていたが近代史には疎いので次々飛び出る固有名詞に頭をくらくらさせながら何とか意識を保った。

一通りクリスが満足するまで語るとすでに昼時を過ぎていた。疲れて帰りたいと言うのもあって、ご馳走すると言うクリスに遠慮しまくったのが、地球人マニアな彼には逆効果だったらしく、”一度は遠慮すると言う二ホンの文化ですねッ”とキラキラした目で言われる。

アキは顔も知らない文代さんに言いたかった”空気を読むと言う文化をきちんと伝えてください”と。

そしてひそかに学院でKYをはやらせようと画策したりしなかったり。

結局押し切られて3階の図書館利用者専用の食堂の中の異様に広い個室に案内された。アキはこれは食堂とは言わないだろうという気持ちで心の中に仕舞いこんだ。

レストランさながらの店内（？）に比べても上品かつ高級感あふれる内装。誰が使うのさ、って王宮図書館だからお偉いさんか。

きよろきよろしながら席に着くと、クリスはウェイトレス（もう食堂とは言うまい）さんに”いつものものを”といった。

なぜか麗しい顔のクリスが一瞬だけ居酒屋のおっさんに見えた。”
おい、いつものたのむ”

わくわくしながらメニューを出されるのを待っていたら、ウェイトレスさんはアキに見向きもせずたすた去っていった。

若干身構えていたアキは思わずぽかん、と彼の背を見つめた。するとクリスが今日のメニューについて説明する。本当は今日は月一度の休館日だそうだ。

確かにあまり人を見なかった気がする。

「なんでクリスさんは地球の人の研究をしてるんですか？」

「チキユーの人とはアースの民のことですか？」

質問を質問で返されてしまった。

クリスさんによれば、初期にこの地を開拓した人々の手記から、地球人はアースの民と呼ばれるそうだ。

有名な原因譚なので一般的に見ればアースの民が来た”なんかちよー有名な人がきた、という式が成り立つ。

時を経て来る人数も減り、先代のときもハリウッドスターさながらに騒がれたと言う（本人談）

やがて運ばれてきた食事にアキは目を丸くした。漆塗り（つばい）お盆の上には（ブサイクな顔の）焼き魚、（紫の）大根おろし（？）、なぜかアスパラ入りの味噌汁、雑穀ご飯に、巨大なきゅうりとチ

ーズの和え物がのつていた。

きゅうりは食べごろに切られているが、それでも分かる。でかい。半端なくでかい。お化けきゅうりだ。

してやったり、と微笑むクリスにすすめられて、アキは遅めの昼食に手をつけた。一番無難な雑穀ご飯から。

ご飯ののったスプーンを口元に運ぶ。スプーンで食べることにかな……いやものすごく抵抗を覚えながら口に含んだ。

「おいしいですか？」

めちゃくちゃ期待されている。キラキラした目で見られている。キラリ、キラリラ、キラレスト。この場合は最上級で。

しかしアキは答えることが出来なかった。口を手で覆わないようにするのが精一杯だった。（実際持っていこうとして、テーブルにぶつかった）

相変わらずキラレストアイズを向けてくるクリスには申し訳ないが、こればかりはどうしようもない。……辛い。

涙をこらえて麦茶を飲むと、小さくため息をついた。

「すみません……辛いの手で」

うそである。丸つきりうそである。アキは納豆にからしを混ぜるし、すしもわさび入りで食べる。ただこの雑穀ご飯（？）が規格外なのである。

それはまるで白米に七味をぶっ掛けたような味がした。

ちらりとクリスさんを見ると少し残念そうな顔をしている。……

…私は悪くない。

1 - 13 日本食？（後書き）

文化祭が近いので一週間ちょいくらい更新出来なくなります。
申し訳ないです（><）

1 - 14 実験体

？

「げほ、ごほぐふッ」

？

本当に大丈夫なのかと言いたくなるような量の血を咳とともにナプキンに吐き出す。色素の薄いクリスと比べて彼の血は真っ赤だった。すかさずウェイトレスが真新しいナプキンと取り替える。彼はこの発作（？）を食事中に少なくとも3度起こしていた。

？

「あの……大丈夫ですか？」

？

「ふう、大丈夫です。すみません、食事中に。癖なもので」

？

いや、もう食べ終わった（言うほど食べていないが）ので問題は無いのだが、癖とはいかなることか。

懇々と説明されたので結核ではないと言うのは分かったのだが、毎日これって大丈夫なのだろうか。今にもぶっ倒れそうである。

色素が薄いのはお家柄らしいのだが部屋に棺桶があったのはもしかしていつ倒れてもいいようにとか……いやいやさすがにそれはないな。

？

などなどアキの煩惱が次から次へと妄想を繰り出している間に、皿を下げに来たウェイトレスがクリスに何かを耳打ちした。クリスは片眉を上げると、ウェイトレスを下がらせ、アキに向き直った。

？

「学士院からお迎えが来ました。残念ですが本日はこれでお開きのようです」

？

突然のことにアキは思わずポカン、とクリスを見上げた。何しろアキはせっかくだからここで地球の人とアイリオについて少し調べ物をしようと思っていたのだ。

それにさっきまでどうにかして留めようとしていたのに、妙に素直である。

？

誰が来たんだ？

？

アキの疑問は程なく解決された。

上品な濃紺の騎士服を着たエドが静かに入ってきたのだ。心なしか顔が疲れている。また迷ったのだろうか。

しかしエドの顔はクリスを見た途端さらに青ざめた。

対してクリスにはやあ、と口角を吊り上げる。黙って微笑んでいれば病弱の麗人なのに今や実験体を切り刻むマッド・サイエンティストである。

？

私と目が合ったエドはほつとしたようなしなやかな、笑おうとして失敗し、微妙におびえた妙な顔をした。

？

「エド君、とうとう実験に」

？

「付き合いません」

？

「なぜ」

？

「危なそうだからです」

？

「兄よりはやさしい」

？

「あなたの優しいは信用なりません。実験するならあのキザ野郎を

存分に切り刻んでください。俺もあいつの脳内が気になります」

？

打てば響くような返し。やっぱりマッド・サイエンティストだったのか、とかエドなんか慣れてるな、とかなんで実験体に狙われてるんだろうとか、やっぱりクリスとはあんまりお近づきになりたくないかも、とか考える間も話は続く。

？

「クロ君か……彼はつかみどころ無いみたいで、実は分かりやすいつて言う微妙な性格の持ち主だから却下。君みたいにストレートで面白みのある人間がいい」

？

「俺に言わないで下さい。あんたの実験には付き合いませんからね」

？

「まだ23なんだからピリピリしないほうがいいよ。老け顔だからさらにオジサンに見える」

？

エドはひくりと頬を引きつらせた。カツカツとブーツを鳴らし、荒々しい足どりでアキに近づくと、一言「帰るぞ」と言う。

アキは急いで荷物をつかむと早口でクリスに礼を言い、エドの後を追った。

彼が来るといつも急かされている気がするアキだった。

？

？

「なかなか興味深い実験結果でした」

？

クリスは椅子に座ったままそういった。すかさずウェイトレスが差し出したエドのカルテ（？）にカリカリと何かを記入する。

？

「新しいものを」

？

ウェイトレスは再びカルテ（？）を手渡す。

？

上部にはアキ・ホーノキと書かれていた。

？

？

かくして彼女は実験体となったのである。

？

アキは一人で自室につながる廊下を歩いていた。

？

珍しく変な方向に歩き出さなかったエド（日によって違うのだろうか）は、アキを特別棟のまで送り、入り口に着くやいなや、あまり出歩くなと釘を刺し、仕事があるからもう行く、と足早に去った。

偉い人は忙しいのだろう。

？

そう結論付けるも違和感が拭えない。何でわざわざ迎えに来たかということである。

何しろ会って三日だし、わざわざ送り届けてもらうような（また気安くそれを頼めるような）仲でもないし、何より私が望んでいない殿下——クローゼ殿下とか……いやいやさすがにそれはない。他人以上知り合い未満くらいの付き合いだ。

もちろん外出を制限される理由など全く思い当たらなかった。

？

考え事をしながら無意識に扉を開けると、妙に閑散とした室内に思わず立ち止まった。窓から入るぎらぎらとした日差しがまだ日の傾いていないのを物語っている。

？

何だ……足りない……ああ、キルスか。

？

一通り問答すると、あんなに帰りがらなかった、と言うより頑として帰ろうとしなかったキルスがなぜいないのか妙に気になった。散策？いやいや妥当に情報収集？

でも人の目から慎重に隠された純血のアイリオの里は十分安全だし、

大陸制圧するには数が少なすぎる。それに彼らは人間ではないので価値観は全く違うから意味もない。

？

老いるのが遅く予知能力に優れた彼らは賢者の一族とも呼ばれる知恵の深い一族で、500年前人が生きたのも彼らのためであるし、人にとって彼らは神秘の存在なので危害を加えるとも思えない。

？

考えれば考えるほど頭が混乱してきた。

？

「夢、とか……？」

？

思わず呟く。

？

いやいやでも昨日いたし、でも痕跡ないし、いや妄想にしては精密すぎるし、でも記憶は曖昧だし、記憶は確かなはずだし、まあ曖昧といえば曖昧……わからん。

結局キルスに関しては夢かもー、ということ結論付けた。ついてないけどついた。

？

まだ寝るには早い時間帯なので、明日行く場所おさらい、式典プログラム確認。

？

もちろんそれではあまり時間はつぶせない。

仕方ないのでJ・POPからROCK、果てはクラシカルに至るまで小声で熱唱しまくって時が過ぎるのを待つ。

禁止された手前、外に出るのも控えるとストレスが溜まる。

？

もちろん本当に溜まっているかは知りません。専門家じゃないのででもこういう時にストレスって溜まるんじゃないだろうか。

歌を歌うはいいが思いつきり歌えないといういらするし、歌うのを

やめると歌った分日本のことを思い出してやるせなくなる。

？

ここへきて一ヶ月たった今も、私の心は日本に取り残されたままだった。

小さな簡易ソファのクッションに顔をうずめ、小さくうめく。

生まれてはじめての感情ではない。ここへ来た当初などもっとひどかった。しかしここまできてしまうとどうすればいいか分からなくなる。

？

アキは無理やり明日の入学式について考えながらシャワー室に向かった。

？

？

ルテラの沈む頃、ルジイの真上の頃ロングスリップの中で小さく体を丸めた彼女の隣に藍色の猫がするりともぐりこんだ。

？

閑話 学校案内、入学式プログラム（前書き）

Onlookerの眩き、学校案内から一部と入学式のプログラムです。

よまねーよと言う方は戻るボタンもしくは次の話（更新されて入れば）を連打DADADA!!

閑話 学校案内、入学式プログラム

入学式プログラム

- 1 前奏 三年 リリア・バートル
- 2 祝辞 院長 フレデッド・ランスポンス
- 3 答辞 研究科代表
- 4 女神の賛歌斉唱 一同
- 5 祝辞 警兵隊隊長 マルク・シェーシル
- 6 答辞 武芸科代表
- 7 創立の言葉朗読 三年 ルイス・ファンテッド
- 8 祝辞 在校生代表 クローゼ・アティラン・レイ・
- スキラート
- 9 答辞 普通科代表
- 10 新人生退場

入学式当日の流れ

- 1 午前9時に中庭に集合。
- 2 集まり次第入学式練習開始。プログラムは当日配布します。
- 3 午前9時30分、入学式開始。
- 4 午前11時半、終了。1時間の食事休憩に構内の食堂で昼食を摂ること。（弁当可）
- 5 午前12時半、各クラスにて、担当教員の説明を聞き、級長を紹介。終わりしだい帰宅。

(学校案内より抜粋)

1 - 16 脳内お天気お姉さん

登校初日目、9月1日。入学式後の昼休み、指定された教室に行く前にアキは食堂でアランと昼食を摂っていた。

ちなみに本日は雄牛のフリカッセ（細かく切ってソースに煮込む）、ムール貝のサラダ、チーズパンにした。……少し重いのでフリカッセは少なめにしてもらった。

？

？

入学式は滞りなく進んだ。

？

集合した中庭は大きな木々に囲まれ、上品に整えられた小道と無駄に石が敷き詰められていないこともあって自然味豊かであった。それでも向けられる視線が和らぐわけではなく、唯一の知り合いであるアランに話しかけられたこともあってか（彼は普通科代表として壇上で挨拶した。優秀）とてつもなく居心地が悪かった

？

まあ前述したように滞りなく進んだのは良かったが、アキは緊張しすぎて肩が凝りそうだった。芸能人とかはこんな気分なのだろうか。しかしアランは気付いているのかいないのか、涼しい顔で微笑んでいる。食えないのか、はたまた気付いていないのか……おそらく後者だろう。

？

アキはため息をサラダと一緒に喉の奥に押し込むと、そつとアランに目を向けたやっぱり食べる量は多い。しかも結構。アキの2.5倍は食べている。

目の前で次々に肉（それは正に肉！）を消費するアランをすっかり見てしまったアキは無意味に疲れた。先にフリカッセを済ませておいてよかった。

？

アランは私にいろいろなことを話してくれた。とくにこの学校の決まりごと、暗黙のルールみたいなのはものすごく助かった。……逆に言えば他のは結構どうでもいい戯言だった。

二回連続で同じ国から来たというので、巷では日本語が流行っている、とか。しかも貴族内での（とくに高位の）若い方々に人気で、この学園も（これは少し前からだが）風学期を秋学期、雨学期を梅雨学期などと呼ぶ生徒がいるとか（渋いな）。

時代にのつとつていれば確かに（痛）カッコいいのかもしれないが、いかんせんアキはよそ者なので分からない。しかも元ネタが分かるだけあって、ウケる。物凄く。とくにクローゼ殿下とかカッコつけるクローゼ殿下とか渋いクローゼ殿下とか。

？

あの顔でカッコつけて梅雨とか言われた日にはもう無理だ。秋よりさらに日本くさくてウケる。この前もさりげなく秋学期とか言ってたけど、そうか、あれはさり気なくカッコつけてたつもりなのか。分からなくてすいません……ププッ。

？

ただこの国は共和制を敷いているとはいえ差別がなくなったわけではなく、特に女性差別は未解決どころか、この学院に女生徒が入れるようになったことさえ驚くべきことで、これを始めた公爵家は諸侯から果ては農民にまで、学問をするなんてと蔑まれたという。

？

？

？

しかもこれは過去のこととなったわけではない。この状況でそこまで親しくない私にその話をする所はある意味尊敬するが、彼の突拍子のなさや語り癖には、あまり嬉しくないが、慣れてきた。

むしろ１ヶ月で習得できなかった一般常識が分かって良かったという面がある。一部聞いていないが。

？

皆さん、学校に入学して一ヶ月の自分を思い浮かべてほしい。

一ヶ月もすればほとんど学校生活には慣れるだろう。しかしあなたは突然全寮制の学校に転校することになった。

新しい学校の決まりごとは知らないし、代々こうだ、と言う決まりごとも知らない。部活動も少しだけ気まずい。といったところだろうか。

？

そこでアランは転校先にいる世話やきでKYだがいろいろ教えてくれる頭のいい級長である。

めちやくちゃラッキーではないか。

？

ただ困るのは彼がモテそうだということだが、女生徒は5人だしまあみんな（日本語でカッコつける）クローゼ殿下に行くだろうという希望的観測。

？

？

世の中のお姉さま方は懷が大変広がっていらっしやるので、いろんな人のファンになるでしょう。

？

？

私の脳内お天気お姉さんが、傘マークの棒を片手ににっこり微笑んだ。

1-17 やっぱり図書室

9月2日、食堂に一番乗りして誰もいないうちに朝食を済ませた。普段ならぐずってもうすこし寝るのだが、目が冴えて、寝れないし、人が来ないうちに朝食を摂るのは名案に思えたからだ。

結果、登校が午後からなこともあって、アキは時間が余ってしまった。本当なら王宮図書館にでも行って所謂“異世界迷い込み”のメカニズムを調べたかったのだが、入学式からは外出許可証が必要になる。それに“王宮”図書館に行くのはどうも気が引けた。

結局、図書館が開く9時ごろを見計らって部屋を出た。

図書室にいたのはシャツにシンプルな薄手の長い上着を着たピンク（それはまごうことなきピンク！）の髪の司書だけであつた。

気にならない振りをして、ちらりちらりと視線が向けられるのが分かる。

東洋人的な容姿もさることながら、やはりふとした仕草や雰囲気からも彼らは正確に自分たちとの違いを見つけるようだ。

アースの民について研究され、まとめられた本や、伝承を4冊ほど手に取ると、カウンターに向かった。

「お願いします」

「貸し出しですね、イメージを見せてください。……………その腕輪です」

そつえばアランがそんなことを言っていたかもしれない。

指示に従って小さな台座の上に腕輪イマージェを置くと司書はそれを少し見るだけで触りもせずにアキに返した。

「本を」

司書は本を受け取りながらも遠慮なく視線を向けてくるので、アキは目を合わせづらくて少し下に視線をそらした。
貸し出し期限は2週間、つまり10日。

これだけここにいても、1週間で考える自分がいた。

同日、午前8時30分。

ふつうに人より遅めに食堂に着いた彼女は、今日も今日とて今にも営業中の看板をひっさげようとする食堂の人に泣きついて（脅して）最後の食事を出してもらっていた。

相変わらず暗い色の（今日は濃紺だ）ローブを着た彼女は異常に怪しい。祖母を真似たという日本人形のような長いストレートの黒髪もこの国の人々には奇妙に映るようだ。

しかしそんなことは微塵も、またミドリムシの纖毛の先ほども考えないのが彼女だった。

食堂のおばちゃんに尻を叩かれ、真っ赤なトマトケチャップのかかったオムレツを持ったひ弱そうな料理人がぶるぶる震えながら皿を

差し出す。

にやり、とフードの中に半分隠れた彼女の顔が笑みを作った。

名もなき料理人はサササツと後退する。

彼女はゆっくりと食事を楽しんだ。

そしてもちろん食べ終わったら速やかに図書館に向かうのだ

あああああ――！！！！

夜行性はつらいわ！！本当にね。

まず朝起きられないのよ。目は覚めてるのよね、もちろん。ただね、布団から出るのが大変なのよ。

（それは単なる低血圧である）

だけど今日は必要ないのにがんばったわ！7時30分に起きたのよ。何しろ予感がしたのよ。今日は7時30分に起きなきゃいけないからね！

まあ、勘よ、勘。

はッ。もしかしたらあの冷笑の似合う転校生に会えるかもしれないわ！！

何しろおばあさまの国の人は勤勉で謙虚で礼儀正しいと言うから、きっと敵の逃げ道を無くしてじわじわ追い詰めて最後にちらりと希望を見せたまま絶望の淵に突き落とすんだわ！！

一瞬でそれだけ考えた彼女は意味尊敬……いやむしろその発想に飛躍したところなど一種の天才のような気もするが、ストップパールのいない彼女の脳内で、妄想は爆裂する。

それにしてもうわべだけ取り繕ったようなクロりんは何してるのかしら。一緒にいたらいやねえ。いやまさかあの微妙に世間をあえて斜め39度から見ているようなおばあさまと同じ故郷なんですもの！あんな若造、ぺいっとゴミ箱に捨てているに違いないわ！

も、もしかしたらひそかに弱みを見つけていたぶろうとしているかもしれないわ！
おばあさまがよくやる手口ね！！

終わりのない妄想の大海は、図書館に着いたことによって一瞬で枯渴した。

そこには例の転校生がいたのである。

1 - 18 暴かれる裏の顔（笑）

扉を開けた瞬間、目の前に立っていた黒いローブの怪しい人物にアキは一瞬固まった。

（明らかに、怪しい）

しかし君子危うきに近寄らずとも言つので、無言でアキは道を開けた。

横にそれてかるくローブの人物を伺っていたのだが、どうも動く気配がない。かといって押しのけて通るわけにもいかない。

声をかけようか道が開くまで書棚をぶらつくか迷っているうちに目の前の人物はフードを被ったまま足音ひとつ立てずにすすす、とアキに詰め寄った。

アキは予想外の至近距離に思わず体をのけぞらせる。

口元を引きつらせるアキにかまわずぐいっとな顔をさらに近づける彼女。フードの間から見えた顔は整っていて、丁寧到手入れのされた白い肌は真っ黒な髪に映えた。

彼女は軽くフードを上げ、アキと目を合わせるとニタア、と笑った。

「ごきげんよう」

「ご、ごきげんよう」

そのまま静かに身を引いた彼女にアキはほっとして体勢を元に戻した。

ローブの下から見える制服から、彼女がこの学院の生徒なのは分かるのだが、あまりに個性的でどう接していいかが分からない。

少ない女子同士よろしくと言うべきだろうか？それとも女子が少ないのは大変ですかと聞くべきだろうか？
それともここは妥当に自己紹介かな……。

フードの彼女は相変わらず怪しい笑みを湛えたまま佇んでいる。しかも今度は手帳を出してなにやら必死に書きとめてだした。

「アキ・ホーノキ・アークライトです。——あの、よろしく御願います……」

「しってるわ」

「あ、はい」

見も蓋もない彼女の物言いにアキは苦笑した。
しかし一介の新生生まで知っていると。もしかして私が女だからだろうか？

「あなた」

「はい」

「いい！いいわ！その目！最高に冷笑が似合うわよ。敗者を足蹴にしてヒールで踏みつけて高笑いするところが見たいわ。そう、後は数々の男を手のひらで転がしてその様子を鑑賞する孤高の権力者ね！自分にすがり付いて来る弱者を謎めいた笑みで不安にさせ、ゲームを後ろで操り、くるくる踊る哀れな犠牲者を冷徹な笑みで地獄に突き落とす……！」

興奮したのか何なのか、熱く語りだした彼女はさりげなくアキが一

歩後ろに引いたのにも気付かず、物凄い勢いで今度は自己紹介を始めた。

「私はエミリー・ウィルソン。研究科の生徒なの。あなた転校生ね？女の子同士仲良くしましょう。学科が違うからあまりあえないけど困ったことがあったら言ってね。うふふふ」

一応エミリーとしてはまとも自己紹介したのだが、どうも最後の笑みが少々怪しい。

「はい、ありがとうございます」

所謂“愛想笑い”を浮かべて礼を述べるとエミリーは満足そうに微笑んだ。

ただ問題なのは彼女が満足そうに微笑むと、外からは口元しか見えないので、怪しい人物がにやりと笑ったようにしか見えないということだろうか。

「特に！」

エミリーは少し声を荒げてそういった。

「はい」

「あの茶髪の陰険野郎には気をつけて」

「あ、はい……」

此处で茶髪の知り合いといえれば私には殿下しかいないのだが、THE王子フェイスにTHE高貴な人っぽい振る舞いな彼が陰険なのだ

ろうか？あ、裏の顔とか？多重人格的な？

それならちよつと渋い言葉にはまっけても頷けるかも……あの顔で多重人格その1武士道にアツいとか。

エミリーに当たり障りのないほどの相槌を打ちつつ、アキはひっそり笑うのだった。

1 - 19 断じて覗きではありません

その日の午後のことである。

登校初日である今日は新入生が上級生の研究を見学したり、構内を見て回ったりする日である。ただし教室の見学は講義の邪魔になるので外から覗くだけとなっている。

そして案の定というかなんというか、アキはやはりアランと一緒に見回ることになった。

解散してからそれぞれ自然とグループに分かれ、中にはこそそこそと外をうかがう者もいる。何しろ3時に講堂に帰るまでは自由行動なので、抜け出そうと考える輩も少なくはないようだ。

ちなみにアキの手の中の地図に書かれているのは学院の内側のみ。低めの塀や柵で区切られた外周はまだ学院の敷地で、いくつか建物があるがここは郊外の者も（警備兵に止められない限り）自由に入ることができる。

町まで行こうと思ったたらそれはなかなか大変なことになるだろう。

「講義棟についたよ。……あ、ほらワイズマン先生が授業してる」

アランの言葉にアキはふと建物の中を見渡した。何も考えずにとりあえずアランについていったので思わずどんなところにいるのか忘れてしまったのだ。

「広いですね」

アキは吹き抜けの天井を見上げながら言った。中央を走る廊下の吹き抜けは、2、3階の両端をつなぐための道以外は遮られることなく天井を見ることができ。

1階からはよく見えないが、白地に黄色を基調とした彫刻は緻密で、どこかの宮殿と言っても遜色ないように思われた。

「うん。何しろ元は官吏を育てる国家直属の養成機関だし、行事ごとには外国からの来賓者もいるから恥ずかしくないようにしなきゃならないからね」

すごいですね、と半ば呟くようにアキが言うと、アランは嬉しそうに顔をほころばせてこの学院がスカート王国にとっていかなるものか、などを説明しだした。

おそらく彼はあまりこの国に詳しくないアキに説明するのが嬉しくて仕方ないのだろう。（芸能人に自分の学校のいいところを紹介するようなものと思ってもらえればいい）

普段の彼はもつと落ち着いているし、控えめだからまあある意味いい事なのかもしれないが。

習うより慣れるとはよく言ったもので、アキは彼の言葉を半分くらい聞き流しながら……へえ、とかうん、とか言っていたのだ。

「……その低い塀の外側に建物が増設されたから、ここが講義棟になって、でも教室が多すぎるから3階は使われてないんだ。だから

――」

「きゃああー！」

「すごいー！」

「ああー！」

講義棟の東出口を出た途端響いた数多の女性の黄色い声に、二人は思わず歩みを止めた。

規則正しく植えられた落葉樹のせいでよく見えないが、どうやら修練用の広場で武芸科の生徒が模擬演習を行っているようだ。

おそらく声援は柵の向こう側に群がる女性のものだろう。

アキは思わず一瞬“人間ってどこでも一緒だ”と思ってしまった。
いや全く。恋する（？）女性の情熱たるや、恐ろしいものである。

「あ、クローゼ殿下がいる。3年生だね。……噂には聞いてたけど
すごい人だからだなあ」

アランは目を細めながら歩いて広場に近づき、木々の間からその様
子を窺った。アキもそれに倣う。

「噂ってなんですか？」

「ああ、研究科なのに自分の授業のない間はちよくちよく武芸科の
稽古に参加してるってやつだよ。なんでも武芸科にライバルがいる
とかって。確か今まで通算ナント力戦ナント力引き分け。あんまり
覚えてないけどとりあえず毎回引き分けになるらしいよ。……で、
その勇姿を見ようとどこから聞きつけたか女の子たちが集まるんだ」

アキは物珍しそうに人だかりを見ながら表情を変えずに応えた。

「へーすごいですね」

「あれ？興味ないの？」

「え……いや別にそうじゃないですけど、あの中に入ろうとは思ひ
ませんね。私はあんなにハッスルできないので」

軽く肩をすくめるような仕草をしながら言うと、アランは、ははは
と声を上げて笑い出した。つられてアキも少し笑うと、彼に促さ

れるままその場を後にしたのだった。

1 - 20 お久しぶりです

ほんの三時間ほどだったとはいえ、アキにとっては久々の楽しい時間になった。

何しろ怖さ半分、申し訳なさ半分で、辺境伯の屋敷にいた頃は人の少ない時間を見計らってこそそと家政婦に付いていつていたので、同年代のアランと話すのは久しぶりに思い切り笑い、そして美しい学院に癒される素晴らしいひと時となっていたのである。

？

この寮に来てから今日でちょうど5日目である。

ここに住む生徒は2人だけであると言う殿下の言葉通り、この寮で他の生徒に会うことはなかった。

さらに、アキが少し早めに寮を出ることや、一階のロビーや廊下をあまりうるちよるするわけでもないの、殿下とは全くといっていいほど会わなかったし、エドを見かけても軽く挨拶をするくらいでこの寮の住人とはほとんど接点がなかった。

？

まあ二人のことはともかく、この部屋にも馴染んできてアキは自然とリラックスすることができた。意外と順応性が高いのかもしれない。

壁は染みひとつない。木製のしっかりした机に、ああ入学式のプログラムを後で片付けなければ。

規則正しく並んだ教材、少し大きめのベッドには藍色の猫……猫？

（夢じゃなかったっけ……）

？

例の猫に非常に似ているのだが（毛並みは相変わらずふつかふかだ）中途半端に会っていなかったの、でなんと話しかければいいのか……
と言つか夢じゃなかった？あれ？現実だった？

現実ならアースの民について聞きたいことがごまんとあるのだが。
まあいい。

？

「あの、カルロスさん……」

？

「カルペンティエールだ」

？

（喋ったああああ！！）

どうやらやっぱり現実だったようです。

？

「もう一回言っていたとしても、いいですか……」

？

「カルペンティエールだ」

？

「カルペティールさん？」

？

「カル・ペン・ティ・エール」

？

「カル・ペ・ティ・エール」

？

「違う。ペン」

？

「ペム？」

？

辛抱強く指導するカルペンティエールだがなぜかどうもアキの発音が気に食わない。実際に発音するとほとんど違いはないのだが、人間より聴覚が優れているせいか彼は気になって仕方がないのだ。指導は続く。

？

「カルペンだ」

？
「カルペヌ？」

？
「いや——いいキルスと呼べ」

？
「ええ！すみません！申し訳ないです。どこが違つのでしょうか？
あの、ほんとすみません！」

？
キルスはベッドの真ん中で悠々と座りながら言った。

？
「だからキルスと呼べ。妙な名前で呼ばれるよりましだ……」

？
「みよ、妙……。いえ、あの直しますから」

？
「面倒くさい。それにいちいち長つたらしい苗字で呼ばれるのも鬱陶しいから気にするな」

？
「あ、はい。ホント申し訳ないです」

？
キルスは綺麗な藍色の長い尻尾をひよいひよいと空中で躍らせた。
片目を眇めているようなのだが、いかんせん愛らしい猫の姿では威厳なんてものは微塵も漂つてこない。

？
「珍妙な。そこはありがとうではないのか？なぜ謝る？」

？
「あ、え？すみません……」

？
脱線に脱線を繰り返し、なかなか核心を聞くことができないでいる
アキであつた。

1 - 20 お久しぶりです（後書き）

英語っぽく発音してもらうとカルペンとカルペムがあんまり変わらないのが分かります。

1 - 21 わたしが何か、とか

「受け入れられないのか」

？

キルスは唐突にそういった。

汗を流し、ベッドに腰掛けたアキが動揺を押し隠すように、ちんまり鎮座する猫に怪訝そうな顔を向けると、キルスは眠そうに大きなあくびをしてそっぽを向いてしまった。

？

今日、アキは彼に聞きたいことがあったのだ。

それは、過去に5例ほどあるアースの民についての記述のことだ。

——ある日突然、彼らは故郷へ帰ったという。

キルスに帰ることができないと言われた時、“そう”とは言ったもののやはり心の中で疑念を抱えていたし、信じるに値する理由もなかった。

？

だからこそ、図書館でアースの民について調べていた。

彼らはこの国で何をなし、どのような評価を受けていたのか。彼らの行動はこれからアキがどうするかに役立つし、そもそもアキはここでどのようにして生きていけばいいのか皆目検討が付かなかったのだ。

？

高校生であったアキには大学受験という大きな目標があったし、その先には就職だってあった。

周りに例はたくさんあったし、アキだってそういう風に生きていくと漠然と考えていたのだ。

？

しかし今はどうか。そもそもアキは突然現れたいわば“異端児”である。

現代では書籍でも購入すれば手に入ったはずの知識は、外出を良しとされないアキが手に入れるのには困難すぎる。

それにもし手に入ったとしてもそれが何の役に立つと言っのたろうか？

そもそも根本的な部分で違っているアキにはこの国を知るすべにはなつても将来を設計する材料にするにはあまりに心許ない。

アキはあまりに特殊すぎた。

？

生きる意味、とはいかなるものであるか。

？

口に出すのとはばかられるほど使い古された陳腐な言葉だ。

しかしこの一文は現在アキにとって非常に重要なものである。すなわちここにすべてがかかっているからだ。

？

この学院に来るまでの一ヶ月間、アキはどこか夢見心地で一日を繰り返していた。

ただ私は日本の高校生であるということに取りすがって、それらしく暮らすことばかり考えていた。

例えば、日本人は礼儀正しい（私は礼儀正しくあるべきである）高校生は大学受験にむかって勉強に励むものだ（私もどうにかして勉強しなければならぬ）。

？

この学院への入学はある意味転機かもしれない。

ここへ来て、アキにはとりあえず無事卒業すると言う目標ができたし、それは今後のことを思うと必ず必要とまではいかないものの、悪い方向には向かないはずだ。

？

ただ、不安である。

自分の将来の見えないということ。

？

10年後の自分は想像できるか？と問われたら、現代にいた私は確実に、どこかに就職している。と応えただろう。きっと一人暮らしをしていて、きっと運転免許を取っていて、きっと……。

少なくともその様子を少しくらい思い浮かべることだってできたのだ。

——わからない。

自分がどうしてここにいるのかも、どんな未来が待っているかも、どうすればいいのかも。

？

何を話しかけたいかは分からなかったが、何かを話しかけようとしてアキはしばらくキルスを見つめていた。

実際何度か言葉を紡ぐと口を開いたのだが結局声をかけず、穏やかに眠る様子をしばらく見つめてから自分も眠りについたのだった。

1 - 2 2 鬼教師繁殖注意報

それから始まった学院生活は、アキにとっては拍子抜けするほどスムーズに進んでいった。といってもまだ一ヶ月も過ぎたわけでもないのだが、異世界だと意気込んでいたアキにはどこか平凡に感じられたのだ。

少し、期待もあつたのかもしれない。

かといって、全てが平凡であるというわけでもなかった。

「これで三度目だ」

がつしりとした体格に、口髭を蓄えた男がそう言った。教授用に作られた椅子は彼には小さすぎるようで、身動きをするたびにギシギシと音を立てている。

「講義棟の鍵を掛けて廻るだけだ。なぜこう立て続けに同じ窓ばかり見落とすんだ？しかも3度も！！」

「すみません」

涼やかな声が神妙に空気を震わせた。アランである。

その隣でアキが発した謝罪らしい言葉は彼の声に重なって聞こえにくい。

「はあ……」

男は深いため息をついた。しかしため息をつきたいのはアキたちの

方だ。

二回目以降は特に念入りにチェックしたため余計に腑に落ちない。

「今日から2週間日直をなさい。ランドルの肖像画の辺りに監視する者を待たせているから一緒にきちんと仕事をこなすんだ」

「はい」

教授は不機嫌そうに眉をひそめ、じろりとアキを睨め付けた。武芸科教授なだけあって迫力がある。アキには平然としているアランが信じられなかった。

聞いたところによると剣術部の教授らしいが、詳しいことは知らない。

研究室から出るとアキは今度こそはつきりとした口調で、しかし普段よりも少し小さい声を発した。

「失礼しました」

「失礼します」

少し後にアランの声が追隨する。やはり彼はしっかりした口調だった。

研究室からある程度離れるとアキは大きくため息をついた。思いのほか……というか物凄く緊張していたようだ。

今にも膝をつきそうなアキを見てアランはふふ、と笑みを浮かべた。

「あの先生迫力あるよね」

そういう自分は結構余裕そうだ。彼相手に自然体なアランは実はすごいやつかもしれないとアキは思った。

「あー、寿命が縮むかと思いました」

さらに笑みを深めるアランをアキは恨めしそうに見る。そして再び思い出してはがっくりと肩を下げるのだった。

しばらく歩いているとランドル卿の肖像画が見えてきた。彼は生涯を生物の研究に費やした人で、晩年は研究を続けつつこの学院の学院院长も勤めた人物だ。

彼の出版した生物辞典は今でも改変を重ねて出版され、学院の授業にも使われている。つまりすごい学者さんだったのだ。そして彼がその生物辞典を完成させたこの講義棟の一階の廊下に大きな肖像画が他の著名人と共に飾られることになったのである。

その肖像画の前にたたずむ人物を見てアキはへにやりと気の抜けた笑みを浮かべ、つられて目を向けたアランはひくりと笑みを引きつけたのだった。

1 - 2 2 鬼教師繁殖注意報（後書き）

はう。遅くなつてすみません。
テスト終わりしだいまた更新がんばります。

1 - 23 日直のお仕事

例の肖像画の前に立っていた彼——エドは相変わらずの仏頂面でアキたちを出迎えた。一瞬彼の仕事は大丈夫なのだろうかという心配が頭をよぎったが思ったことをそのまま口にするほど子供でもない。ご迷惑をかけて済みません、と言うと彼は少し変な顔をして気にするな、謝らなくていい、といった。

そして今度はアランに声をかけようと斜め後ろに顔を傾けると、自信家のきらいがある彼にしては珍しく、少しうつむいていた。心なしか顔も青い。心配して覗き込むアキにかまわず、アランは意を決したようにエドと目を合わせた。

「閣下！ああ、あの！僭越ながら普通科の生徒長をや、やらせていて、頂いているアラン・オデラートです。あの、わざわざお手を煩わせても、申し訳ございません。叔父がご迷惑を……」

アキは驚いて一瞬言葉を失った。確かにエドはクローゼ殿下と気安く話すし、この学院の警備を任されているから偉いのもかもしれないが、初対面から方向音痴を目の当たりにし、彼自身から碎けた口調で話されるアキにとってアランの行動は驚き以外の何物でもなかった。

しかし彼は少し片眉を上げただけで、対して動揺したような様子も見受けられない。

「いや、気にするな。君の叔父上は優秀だし私は今宮廷を離れている身だからそうかしこまる必要もない。君の叔父上が私のことをどのように言っているかは、まあ……想像がつくが、別にとって食っ

たりはしないから」

そしてエドは二人に言葉を与える隙を与えないまま続けた。

「閣下と呼ばれるのはあまりよくないからエドとでも呼んでくれ。

……無理ならせめて隊長くらいで」

良くないって何だ？

かすかな違和感。都合が悪いのか自分がいやなのかなんとも奇妙な表現の仕方だ。

青ざめるアランが気の毒になったのか、エドは途中で言を翻すと、さっさと終わらせてしまおう、と言って二人を促した。

そのおかげでアキの小さな疑問は解決されないまま忘れ去られたのである。

「ここが例の」

そういつてエドはさまざまな資料が乱雑に積み上げられた部屋を見回した。ここが三度にわたって戸締りをされなかったと言う部屋である。3階にあるさして大きくない資料室で、特に天文学部の過去の観察結果などがしまわれているようだ。

ルテラ、3月10日と記された資料が机の上に置かれている。

エドは念入りに部屋を調べ、アランが閉めた窓も鍵がかかっているかチェックした。使われていない三階にしては他の部屋よりも新鮮な空気が流れている。

「じゃあ次に行きましょう」

アキが促すとエドはうめくように同意し、資料室を後にした。扉の鍵も確認する。今度こそ大丈夫だろう、と無理やり思うも、アキはまた次の日になると鍵が開いているような気がしてならなかった。もしかしたら、アキがそうなってほしいと思っていたのだろう。そうなればアキたちの濡れ衣は晴らされるからだ。

廊下に出るとランタンの光がより小さく感じられた。

長い間働いて光を失った光石は三階が使われないからと言う理由で取り替えられていない。一階と二階の光石には覆いがかぶせられていて、カーテンも締め切られている。日が傾いてきた今、講義棟の中はランタンの明かりがないと何かに躓きそうなほど暗かった。

「お疲れ様です。鍵、かたづけときますね」

アキはアランから鍵を受け取ってそういった。

「ありがとう。また明日。……失礼します」

アランはエドに小さく礼をとる。はじめよりはましだが、やはりどこか緊張しているようだ。

アキはアランに手を振ると、エドと共に警兵隊まで鍵を返却しに行ったのだった。

1 - 24 モンスター エド

次の日のことである。

一日の授業が終わり、手提げ袋に教科書を片付けていたアキに少しだけ深刻な顔をしたアランがやってきた。言わずもがな、日直の仕事のためである。

「ねえ、昨日の資料室、今日の朝はちゃんと閉まってたみたい。廊下であの先生に会っちゃてさ」

アランは参ったよ、と言うようにため息をついた。そしてどちらからともなく歩き出すと、いつものように鍵を借りに行った。今日も例の肖像画のところに監視に来る人がいるらしい。

少し空が曇り気味なのが関係あるのかなのか、なぜか鍵の番をしている警兵隊さんが妙に疲れているように見えた。

「なんか、思ってたより普通の人だったなあ」

アランが管理室の扉を閉めながらぼそりと呟いた。誰のことなのかは大体見当がつく。

「エドですか？」

アランはふと振り返るとアキが隣にいることにまるで今気付いたかのような顔をした。チャ、と中指で上げられた眼鏡の向こうもいつもより少し元気がなさそうだ。

「僕の叔父は王宮に勤めているんだけど、存在するだけで周囲に多大な迷惑をかける人で……特にエド隊長のことは昔から聞いてたか

らよほど迷惑を掛けてるんだろうと……」

アランはしばらく考え、ああそうか、あの人の言っていることを信じたのがいけなかったのか、などと呟いていた。

「でも、王宮に勤めてるんならエドとあんまり接点くないですか？」

「ああ、一応今はね。でも彼ってクローゼ王子殿下に直接仕える騎士だから、彼にくつついてこの警兵隊隊長に一時的になつたらしいよ。ああいう式典には元の隊長が出てくるけど実質的にはいまあの人が隊長みたいだし」

「ああ、だからあの人も特別棟に住んでるんですね」

「え、そうなんだ？それは知らなかったな。……はあ」

「どうしたんですか？眼鏡に粗大ゴミですか？」

「あ、本当だゴミついてる……じゃなくてまず眼鏡に粗大ゴミはつかないからね！」

「すみません、思わず」

「なんで思わず！？ってそうじゃなくてさ……」

アランがぐりと肩を落とした拍子にずるり、と眼鏡がずれる。そういえば彼は妙にエドに緊張していた。

「エドって……やっぱり偉い人ですよね」

「？ああ、うん。……でも僕は叔父に変なことばかり聞かされてたからね」

言うや否や、再び青ざめるアラン。変なこと。変なこと。――

「例えば……半径一メートル以内に近づく人間をちぎっては投げちぎっては投げ。あとは、不快な言葉を聴くと問答無用で発信源を池にドボン。鋼の肉体は普段は隠されているが満月の夜には身長は二倍になり、頭から角が生える。そして普段自分を心の中でののしている人間を襲いまくる。ひとたび目をつけられれば無事ではすまないとかナントカ……」

「どこのモンスターですか、それ」

「……うん。なんで今まで気付かなかったんだろう」

「謎ですね」

「うん」

そして決意を新たにしたアランと、彼に長年にわたってご認識されていたエドと共に、日直の仕事をこなしたのだった。

1 - 25 大雨注意報

アキが罰則を貰ってから、一週間が過ぎた。

監視には毎回エドが付き、初めはもってばかりいたアランも、幾分かなれてきたようでエドとも普通に会話するようになっていた。もともとクローゼ殿下にくつついてきた形で警備の総責任者と言う立場にあるエドが、こんな生徒の罰則なんかにつき合っていていいのか、などと思った。

しかし彼自身は暇だからな、とすっぱり切り捨てた。

もともとこの仕事（こういう罰則はよくあるらしい）もくじ引きになりかけたのを彼が引き受けたそうだ。老け顔に似合わずボラントエア精神満載である。……老け顔は関係ないか。

毎回毎回微妙な期待と共に朝食後に例の資料室を調べていたのだが、昨日からはもういいか、たいしたことじゃないし、という一言により打ち切られている。休みの日はさんでも資料室は全く変わった様子もなかった。

あえて言うならば、机の上に置いてあったルテラの観察日記がなくなっていたことぐらいだろうか。普段使われないから、アキは怪しいと思ったのだが、ここは資料室なので教授が取りに来ないとも限らないし、きっと天文学科の教授が片付けたのだろう、言う二人に納得したのだった。

放課後、用事があると言うアランと別れを告げ、アキは特別棟に向かった。

柵越しにクローゼ殿下以下眉目秀麗かつ地位や金や頭脳や武のある人にうーきゃーぴーと言つたために集まるご令嬢時々婦人も見慣れたものだ。

特に日直をしていると、窓から良く見えるのだ。

たいていが町の小金持ちや下流、傍流もしくは三代限りの貴族なのだが時々明らかに上物の服を着た女性もいる。プライドが許さないので彼女たちはたいてい叫ばない。黙って笑っていて、彼女たちの周りには小さな円ができていて、他の女性をちらりと横目で見ながら佇んでいる。何を考えているかは当然ながら手に取るように分かっているのだが。彼女たちは常に静かだ。

だからアキはいつも、ああいわゆる下の身分の人は馬鹿ね、節操ないわね、とか思いながら実はクローゼ殿下とか見に来ているんだろうなとか思いながら静かに窓の鍵を閉めていくのである。

他の人もそんな普段から叫びまくっているわけではないのだが、興奮して小声できゃーとか言つてたり友人をばしばしひっぱいたり（痛そうだ）しているのを見かける。

漫画か！ドラマか！アニメか！はたまたゲームか小説か！と言いたところなのだが、悲しいかな現実である。かくいうアキの母校でも種類は違うが似たようなことがあったものだ。彼女がただ、はうあーとか思いながら友人と遠巻きに眺めていたのは言うまでもない。

アキは人ごみと言うものが苦手で、いつもはクローゼ殿下が帰ってくる前か（一年は三年よりは幾分か早く終わるのだ）日直で終わって人が佩けてしまつてから帰る。

しかし明日は休みと思い、日直に慣れてきたこともあつて手早く終わらせてしまったことが間違이었다。全くもって、大きな間違いだった。

クローゼ殿下がちょうど特別棟に入っていくところを見たのである。彼は最後ににっこりと笑って手を振ると、柵と垂直にある重い扉を閉めた。小さな悲鳴めいたもののため息が響く。

つまり私は彼を見終わって帰っていく彼女たちと柵越しにある意味鉢合わせてしまうのである。かといって思いっきり引き返すにはもう遅い。逆に目だってしまう。

そうして結局、早足で特別棟へ帰って行ったのである。

少しうつむいて歩く私に、見たわけでもないけれど、視線が、突き刺さっている気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3656n/>

日本人の尊厳-My VITAL SIGN -

2010年12月24日01時15分発行